日英交通史概觀

長崎高等商業學校教授 武藤長藏

一　講演の由來、題目の撰定の說明

只今御紹介を得ました長崎の武藤でございます、先刻開國文化大展覽會を拜見いたしましたが、なほゆつくり明日も拜見いたしたいといふ考へを持つてをるのでありまして、つまりさういふものによつて自分の研究の資料を集めたいといふ考へを持つて參りました。皆さんの前では講演をいたすつもりではございませんでした。ところが長崎縣立圖書館長の永山君が、御病氣のためにこちらにお出でになることが出來ませんので、私が代つて講演いたすことになりました次第でございます。で昨晩その御依賴があつたので、どういふ題目にいたしたらといふことに迷つたのでございますが、すぐ發表いたさなければならないといふことでございましたので、プログラムを拜見いたしますると、講演の題目には表面的に直接に現はれて居りませぬが、要するに日本とポルトガルとの關係、または日本とスペインとの關係といふやうなことについては、御講演さるゝ方が割合に多いのでございます。また日本とイギリスとの關係といふことについて、或は尾佐竹氏の幕末の外交とかいふやうなもの、或は今晩私の後に、御講演されます辻博士の鎖國の得失といふやうな御講演中にも、日本とイギリスとの關係についても御話があることゝ思ひますが、しかし大體において題目といたしましては現はれてゐないやうに感じましたので、それで私は日英交通史の方面についてお話して見ようといふ考へを持つたのであります。しかし自分の專門的に研究するところから見ますれば、或は開國と鐵道といふやうな、極く問題が狹いやうでありますが、さういふ題目にいたした方が、より多く自信をもつてお話が出來やしないかと思つて改題をお願ひしようかと思つたのでありますが、既に發表いたされたので、豫定の如き題目でお話することにした次第でございます。

そこで日英交通史概觀といふ題にいたしましたについて、一應その意義を第一にお話しまするが順序であらうかと存じます。で交通といふことはどういふことであるかといふことを、こゝにお話する時間を持つてゐませんが、こゝにいはゆる交通といふのは、狹い意味の運輸（Transport）及び通信（獨逸語 Kowmuikation 英語 Communication）を合せた交通

（獨逸語の Verkehr）といふ意味で申したのではありません。茲に交通とは獨逸語でフエルケール（Verkehr）英語でインターコース（Intercourse）或はリレーションス（Relations）といふ意味であります。或は英語のリレーションスに當るべき獨逸語のベヂイフンゲン Beziehungen 即ち關係といふ意味であるのでございます。英語で申せばアングロ・ジャパニース、リレーション（Anglo-Japanese Relations）のリレーション、即ち關係といふ意味によつてその歴史的の概觀を述べて見たいとかう思ふのでございます。しかしながらその範圍が非常に廣くなりまするのと、また開國文化大講演會と稱する意味において、その開國といふ範圍だけのことをお話しなければ、或はこの講演會の講演として相應しからぬかと考へたのでございます。しからば開國とは何であるかといふことを考へますると、昨日の西田博士の御講演中開國の意義に就てお話がございましたかと思ひますし、只今私は開國といふものの意義について精しくお話する時間はございません。けれども「一言開國の意義に就て私も述べて置きたいと思ひます。

開國とは所謂鎖國に對する開國といふ意義以外に、德川時代において拓地植民といふやうな意味において、開國といふ語が使はれてをつたといふことでございます。このことは今日の人々から見ると、あまり注意されないことであると思ひますが、すでに今日やかましくいはれる植民といふ文字が、支那に果してあるかといふことを私は漢學者でありませんから深く存じませんが、少くとも日本において植民といふ文字は、オランダ語のフオルクプランチング（Volkplanting）といふ文字を「フオルク」（Volk）は民、プランチング（Planting）は「植ること」であるから文字通りに蘭學者が植民と直譯しました事を私は發見致しました。かく「植民」といふ語を用ひました實例は、長崎の蘭學者志筑忠雄（通稱忠次郎柳圃と號し一に中野柳圃として傳へられて居るのは異名同人であります）が享和元年（西暦千八百一年）に抄譯附註して寫本として傳つた「鎖國論」の中にあります。この「鎖國論」なる譯本の原書は、長崎出島和蘭商館醫員として元祿三年（西暦千六百九十年）より同五年（西暦千六百九十二年）まで我國に在住しました獨逸人 Engelbert Kaempfer 著日本志の蘭譯書（De Beschryving Van Japan）の附錄（Aanhangsel Van de Historie Van Japan）中、日本鎖國の可否を論じたる部分を

享和元年（西暦千八百〇一年）に抄譯附註したものであります。嘉永三年（西暦千八百五十年）に至り武藏國忍の黑澤翁滿が右志筑忠雄の譯した「鎖國論」寫本數本を校訂し、更に刻異人恐怖傳一篇を加へ、異人恐怖傳と改題して梓行したものがあります。それは國書刊行會發行文明源流叢書第三中に收められて居ります。それにも出て居る如く、志筑忠雄はケンペルの日本志中にある、一節を譯して蘭語のフォルクプランチング Volkplanting を植民と直譯し且つ「人を植ゑること彼等（ポトガル人を指す）が國の習なり人をその地に渡して住しむるをいふなり」と註を附して居ります。

またその Volkplanting を譯した植民といふ語と同じ意味に、開國といふ文字が使はれてをるといふことを發見致しまして、大正六年十二月發行の國家學會雜誌第三十一卷第十二號に私は『邦語の植民なる名辭は蘭語の譯なりこの說』といふ論文を寄せて新說を發表いたしました。またつづいて大正七年の一月二日の大阪朝日新聞であつたと思ひますが、私の最も尊敬する故內田文學博士が、「開國」といふ語には凡そ三つの異つた意義があると申して宜しからう。第一は建國とか、紀元とかいふ意味でゐる。第二は鎖國に對する開國であつて、國を開いて他の國々と交通するとである。第三は新に未開の國土を開くとであつて、即ち開拓または植民に當るのであると、內田博士は述べてゐられ、又蘭語 Volkplanting の譯語としての植民に就ても、私の說を裏書する意味のことを述べてゐられます。開國文化大講演會が大阪朝日新聞の主催であるがゆゑに、その開國といふ特殊の意義につきましても、大正七年一月二日發行の大阪朝日新聞紙上に內田博士の論ぜられてをるといふこと、しかしてそれが大正八年四月發行の內田博士著『近世の日本』附錄四「コロニーの譯語としての開國」として收錄されたといふことを、記憶のままに申す次第でございます。この如き開國なる語の特殊の意義と、この日英交通史概觀といふことは別に關係ありませんが、しかしまたこの日英交通史概觀を述べまするに當つて重要なることは、英國または和蘭其他の植民史或は英國または和蘭等の東印度會社の歷史と、日英交通史といふものとは非常に密接な關係がございますから蘭語 Volkplanting の譯語としての植民また蘭英語コロニーの譯語としての開國につきまして私が一言說明致しますのは、强ち脫線した話ではないかと思ひましたから申上げた次第であります。

2　日葡、日西、日蘭及日英交通史の特色

日英交通卽ちアングロ・ジャパニース、リレーション（Anglo.Japanse Relations）について、その歴史の概觀を申すに當つて、第一に私共が考へまするのは日本こポルトガル、或は日本こスペインこの交通、或は日本こオランダこの交通史、日本こ英國ここの交通史こいふものが、如何なる點において特色がそれぞれ違つてをるかこいふやうなことは、歴史研究において重要なることこ思ひます。そこでさういふ點に就て、極めて概括的の話を先づ試みる必要があるかこ思ひます。

日本こ葡萄牙ここの交通、また日本こ西班牙ここの交通は、宗教的交通關係が重要でありました。しかしてそれがために先づ日本こイスパニア人ここの交通が斷たれました、それは後に述べます如く、家康の薨去後德川幕府は基督教禁止を嚴にしましたに拘はらず、マニラから宣教師が渡來して基督教を布教せんこするものが絶えなかつたから、幕府は遂にイスパニアの通商貿易を禁止したのであります。次で日葡の間も絶交しなければならなくなりました。これに反して日本こ和蘭この交通は經濟的で通商貿易のためでありました。勿論醫學、天文學（南蠻人もこれ等の學藝を傳へました）其他の自然科學が主こして傳へられ、それに幕末には社會的科學までも少しは傳へられました。要するに學術技藝に關する歐洲文化の傳來はあるましたが、宗教的交通は禁ぜらるるが儘に、それに從つて日蘭の交通は連綿こして繼續されました。これは日葡、日西の交通こ異つてゐる點であります。若し夫れ日英の交通に至つては、その最初より經濟的であつた事が日蘭の交通こ同じであり、日葡、日西の交通の如く經濟的の外に宗教的交通の重要であつたものこ、その性質を異にしてをりますが、日英の交通は經濟的理由で、英國側より自ら日本を引揚げました。しかし後年延寶元年（西暦千六百七十三年）英國が再び通商を願ひ出でた時に宗教的理由によりこれを許さずして鎖國時代を過ぎた事は、後に少し詳に述べる筈であります。日葡、日西及日蘭交通史こ異り、日英交通史の特色は大要右の如き點にあります。

3 日英交通の起原

さて日英交通史概觀を述ぶるに當り、次に大切な事は日英交通の起原であります。日本人とイギリス人と、或は日本といふ國とイギリスといふ國と交渉を持つに至つた起りは、いつごろから始まつてをるかといふことを說きたいと思ふのでございます。しかしながらものの起源といふことは、これを研究することは非常に困難なことでありまして、たとへば日本人と歐洲人、日本人とポルトガル人との交渉はいつごろからはじまつたかといふことを斷定することは困難であります。（日葡協會發行「日葡交通の起原」所載、駐日ポルトガル公使 José da Costa Carnirce 氏序文、並に岡本良知氏稿ポルトガル人種子島漂着の事實參照）たとへば新しい資料が發見されたりすると前說が覆へされ、或は不明確なものが幾分明確に近いやうになつたり致します。自然科學の如きも、時代が進つてくるといろいろの發見から變つてくるものであります。それと同じく日本人とイギリス人との接觸といふやうなことについても、一番始めは何年の何月といふやうなことを明確に知ることは困難であります。日本側の記錄により例を試みに擧げて見ますると外務省記錄局纂修の外交志稿の第七百九十頁に

正親町天皇永祿七年甲子（西曆一千五百六十四年）英吉利ノ船肥前五島ニ來リ通商ヲ請フ

と書いてあります。この一節は The International Position of Japan as a Great Power by Seiji G. Hishida, 1905 第九十一頁に次の如く引用されて居ります。

A Japanese record mentions, as the first appearance of an English ship, a vessel which anchored pear the "Five Islands" of Hizen, in Japanese Waters, as early as 1554. Another English ship, which arrived at Hirado in 1580, Obtained a permit of trade from Lord Matsuura.

しかし右記事は俄に信ずることは出來ませぬ。西曆千五百八十年（我天正八年）英船平戸に至つたことを書いてゐるも

のは、古事類苑外交部二十英吉利のうちにも引用されてをります【阿蘭陀船平戸入津始末】中に

一、ゑげれす平戸へ入津は、天正八年に而同十年法印様（松浦鎮信）。御停止御寄せ不被成候由日本を引取候は慶長四年之由

一、長崎今の出島はゑげれす長崎へ入津之時町人共願候哉云々

と書いてあるのが即ち夫でありますが、このゑげれすとあるは明に誤であります。

私は英國側に日本に關する記事の最も古きものを求め、又英人にして日本に來らんと試みたもの、若くは實際日本に渡來した英人の最も古きものは何人なるか、又最も早く我國に到達した英船は如何といふ如き問題を、一應調べて見なければならぬと思ひます。又英語で書かれた日本に關する記事の最も古きものとして、現大阪駐在英國領事 M.Paske-Smith 君が近ごろ次の書物を出版しました。

England and Japan

The First Known Account of Japan in English extracted from the "History of Travayle" 1577

Preface by M. Paske-Smith, C. B. E.

H. B. M. Consul, Osaka

Published by J. L. Thompson &Co. (Retail), Ltd.

Kobe, Japan 1928

しかしてこの書の序文（Preface）中に記する M. Paske Smith 君の考證また

"The History of Travvle" 1577 中 Of the Island Giapan, and other little Isles in the East Ocean. By R. Wyles. を近世の綴字（Modern Spelling）に改め説明註釋（explanatory notes）を附せられた Paske Smith 君の勞苦は多とすべきでありますが、しかし私のその後調査しました處によりますればこの Of the Iland Japan, and

other little Ies in the Fast Ocean by R. Willes は the Principal Navigations Voyoges Traffiques & Discoveries of th English Nation by Hakluyt Volume 4 として Everymans Library Edited Ernest Rhys 中に收錄されてをります。(同書第百九十一頁以下參照)

次に英人 Sir Martin Frobisher (C. 1535——1594) は航海家 (Navigator) 探險家 (explorer) でありまして (Cathay) 支那への North West Passage を十六世紀の中葉を少し過ぎた頃志しました。

前後三四回試みたが、結局目的地に達する事が出來ませんでした。ドクトル、オスカルミユンテルベルク氏 (Dr Oscar Munsterberg) の著述「自千五百四十二年至千八百五十四年日本の外國貿易」(Japans Auswartiger Handel von 1542 bis 1554) 中の第五十頁にこの Frobisher の名を Forbisher と誤綴り、彼の企圖に就ても左の如く少しく述べてをります。

Inzwishen wurden auch die Englander noch Japan gernfen. Schon 1576 waren zwei Schiffu nter dem Kapitaen Forfisher von Kauffenten der Stadt London nach Indien ausgerusfet, aber dieser versuch und mehrere nochfolgende blieben ohne dauernde Erfolge (Japans Auswartuger Handel von 1542 bis 1854 Von Dr. Oscar Munsterberg, Stuttgart 1896. S. 50)

設立された Cathay Company が若し首尾よくその探險の目的を達し支那 (Catlay) までも來たと假定しますれば、或は我日本にも關係を持つに至つたかも知れませんが、千五百七十七年五月二十六日探險船が編成された時も、その目的を達しなかつたのみならず、その後の試みも結局駄目でした。David Hume はその著英國史 (The History of England) にただ Sir Martin Frobisher undertook three fruitless Voyages, to discover the north-west Passage と簡單に片着けて居りますが、Sir Martin Frobisher の探險の事は有名で各種の航海記、英國史、また植民史の書物に書いてあり、また歷史派經濟學の泰斗 Wilhelm Roscher の名著第十六、七世紀英國國民經濟學史 (Zur Geschichte der Englischen

Volkswirt hschaftslehre im Sechzehnten nud Siebzehnten Jahrhundert) にあるその名は Sir Humphrey Gilbert, Richard Hackluyt 等の共に出てをります。

(附錄) Hakluyts Voyages; the Hakluyt Society's Three Voyages of Frobisher. その他參照 The Encyclopaedia Britanica にあ Frobisher の略傳及びこの遠征に就て說明を載せてをります。また植民史の書物

Geschichte der europäischen Kolonisation Seit der Entdeckung Amerikas Von Dr. Gustav Rdoff. Professor an der Universitat Giessen. S. 81.

History of Colonization by Henry C. Morris Vol. II. p. 5.

等にも Frobisher の事を書いてをります。

以上述べ來りました處では、日英兩國人の接觸に就ての確な實例は、第十六世紀の終まではまだ無かつた樣であります。而して英人として最も早く我國に來ましたものとして、姓名のチャンと判然知れてゐるものは誰であつたかと申しまするこ、第十七世紀のはじめ即ち西曆千六百年四月中旬（我慶長五年三月初）我國のしかも九州の今日の大分縣下に渡來した（或は漂着したこかいうてをります）ウイリアム・アダムス（William Adams）といふ英人であります。

4 我國史にその名を留めし最所の英人 William Adams（三浦按針）

の搭乘せし蘭舩リーフデ（De Liefde）（前名 Erasmus）

さうしてこのウイリアム・アダムスはどこの國の船に乘つて來たかといふこ、英國の船でなくオランダの船に乘つて參つたのであります。即ち西曆千五百九十八年六月二十七日、和蘭のロッテルダム（Rotterdam）を出帆した五艘の船が一艦隊をなして居りました。その五艘の蘭船の名は

（1） De Liefde （前名 Erasmus）（英譯すれば Charity 愛）

（2）De Hoope（或ハ Hope 現在ハ Hope ト綴ル英語 Hope 望）

（3）Het Gheloove（Geloof, 英語 Faith 信仰）

（4）De Blyde Bootschap（blijde Boodschap）（英語 Good News, glad tiding 福音）

（5）De Trouwe（英語 Fidelity 忠信）

ト申しました。其五艘の和蘭の船の一ッである「希望」「望」（De Hoope, Hoop, Hope）ト申す船にウイリアムアダムスは最初乘ってをりましたが、途中他の船「リーフデ」（Liefde）即ち「愛」號または慈愛號とも譯すべき船に乘換へました。若し乘換なかつたならば彼は日本に來らなかつたのであります。この船の名「リーフデ」はこれを英語に飜譯すればチャリチー（Charity）であります。佛蘭西語ではシャリテー（Charité）獨逸語では蘭語に似て「リーベ」（Liebe）であります。

之等蘭船の内 De Liefde（慈愛）De Hoope（希望）Het Gheloove（信仰）の三艘の船名は新約聖書の内のコリンタ前書第十三章（1 Corinthe 13）（1 Corutiaus XIII）の内にあります、信（Geloof, Faith）望（Hoop Hope）愛（Liefde, Charity）から採つたものであるかと、早く私は何人にも敎はらずまた注意されずして直覺致しました。しかし他の二艘の蘭船（De Trouwe 忠

第一圖　五艘の蘭船の圖

信）及び De Blyde Boodschap（blijde Boodschap 英語の good News, glad tiding 邦語の福音に當るべし）なる僚船の船名は聖書より採りたるものゝは直覺されますが、信、望、愛の三ッの外に忠信、及び福音の二ッを加へて五ッの僚船の名となる所以は、私には不明であります。忠信は新約聖書中提摩太前書四章十二節（I. Timotheus 4. 12）（I. Timothy 4. 12）または同書三章十一節によつたものか、または提多書（Titus）第二章第二節より信愛、同第十節により忠信を探つたのであるか不明であります。信、望、愛、忠信、及び福音の五ッを併せて掲げた例は見當りませぬ。しかし船名の考證は今こゝに深入する必要がありませぬからこれ位でやめます。

（昭和二年四月二十六日（二十七日附）大阪朝日新聞所載予の談話中リーフデ號その他船名に關する部分參照、または新村博士著船舶史考增補末文一節參照）

オランダを出帆しました時は五艘の船でありましたが、途中食糧の缺乏や病氣のために各船共に多數の船員を失ひ艦隊の Admiraal であつた Mahu も途中に熱病に罹つて急死し海中に葬られました。船員中本國に還られるを望むのもあり、或る船は途中本國に引還し、或る船はイスパニア、ポルトガル等敵の手に落ちました。たゞリーフデ（Liefde）即ち慈愛號こホープ（Hoope, Hoop）即ち希望號ゝ二艘のみ、千五百九十九年十一月ペルー沿岸のサンタマリア島（the Island of Santa Maria）を離れ我日本に向ひましたが、千六百年二月下旬（二十三日）二ッの船は大强風のために分離し、希望號（De Hoope, Hoop）は行衛不明こなり、僅かリーフデ（De Liefde）即ち慈愛號のみが、この我日本に到着致しました。それは西曆千六百年四月中旬（我慶長五年三月初）でありました。到達の場所は九州の豐後でありました。

（而してリーフデ號の入港したのは多分臼杵ならんゝの說を、村上直次郎博士は史學雜誌第三十七編第七號所載同博士稿「龍江院のカテキ樣」及史學雜誌第三十八編第九號所載、同じく村上博士稿「再び龍江院の貨狄樣に就いて」參照）

而してこのリーフデ（De Liefde）即ち慈愛號の船尾（Spiegel, Stern）の裝飾像こして、和蘭の碩學エラスムス（Erasmus）の像がありました。その理由はこの船の名は前にエラスムス（Erasmus）ゝ申して居つたから、船名に因んで

エラスムスの像が船尾に裝飾像としてありましたのが、船名變更後も依然として殘つて居つたのであります。而してそのエラスムスの像は、今も猶我日本に殘つてをります。栃木縣足利郡吾妻村上羽田の龍江院に殘存してをつた所謂貨狄樣の像が、即ち夫であります。この像は今は東京上野帝室博物館にあります。

（昭和二年四月二十六日夕刊（二十七日附）の大阪朝日新聞掲載『問題の貨狄像は珍貴な船尾像——三浦按針の乘船リーフデ號のもの』と題する予の談話、並に四月二十七日夕刊東京朝日新聞參照、但し予の執筆したものでなく談話の報道されたものであるから、多少訂正すべきものがある）

私がエラスムス（Erasmus）の像は蘭船エラスムス（Erasmus）の船首の裝飾像（figure head）ではなく、船尾（蘭語 Spiegel 英語 Stern）の裝飾像であるこの斷定を下し、大正十五年七月發行の史學雜誌第三十七編第七號所載村上直次郎博士稿『龍江院の貨狄樣に就いて』中に、村上博士が船首の裝飾像（figure head）であるこ推定されたことこの誤であることをたしかめたのは、

De Reis Van Mahu en de Cordes door de Straat van Magalhaes Naar Zuid-Amerika en Japan 1598——1600 uitgegeven en Toegelicht door Dr. F. C. Wieder Eerste Deel S-Gravenhage Martinus Nijhoff 1923

なる書物の記事に據つたのでありました。（同書第三十頁副旗艦 Vice-admiraalschip たる De Liefde の部の説明その他參照）この書を早く我國で見た人は、和蘭公使館員のスネレン氏（Snellen）であつたこ思ひます。同氏が長崎縣立圖書館長の永山時英君に贈られたのを私は拜見して右記事のある事をたしかめ、その以前に村上博士が船首像であるまいかこの推測をされたのは、誤である事をたしかめたのであります。私は當時上京中この事を直接御話致したいこ思ひ村上博士を御訪ねする積りでありましたが、御渡米後で御會ひする事が出來ず、たゞ東京上野帝室博物館にあるいはゆる貨狄樣の像、即ち Erasmus の像を親しく見て長崎に歸りました。

またこの Dr. F. C. Wieder 氏編纂 De Reis Van Mahn en de Cordes door de Straat Van Magalhaes naar Zuid-Amerika en Japan 1598—1600 第一卷には旗艦（Admiraalsschip）希望號（De Hoop）副旗艦（Vice admiraalsschip）慈愛號（De Liefde）信仰號（Het Geloof）忠信（De Trouw）福音號（De Blijde Boodschap）（これは以前 "Het Vliegend Hert" と稱した）等五艘の關船の繪が掲げてあります。私は今こゝにその繪を皆様の御覽に入れたいと思ひます。（第一圖參照）

この繪の上に書いてある蘭文を轉寫すれば次の如くであります。

Vuijdtloopigh Verhael van tgene de Vijf Schepen (die int Jaer 1593 tot Rotterdam toegherust werden, om door de Straat Magellana haren handel te dryven) wederwaren is, tot den 7. September 1599. toe, op welcken dagh Capiteijn Sebald de weert, met twee schepen, door onweder vande Vlote versteken werdt……

（以下省略）

また繪の下には次の如く書いてあります。

t' Amsterdam, by Zacharias Heijns, inde Warmoestraet, inde Hooft-dueghden.

しかし Dr. F. C. Wieder 氏の書物に掲げてある關船 De Hoop, De Liefde, Het Geloof, De Touw 及び De Blijde Boodschap なる五艘の繪と同一の繪は、私の學校に早くから備付けてありました英語の本（その本を示し）

The Golden Book of the Dutch Navigation by Hendrick Willem Van Loon. New York The Century Co. 1916.

の第七章 The Attack upon the West Coast of America と題する部分の第二百〇八頁にも掲げてあります。たゞ繪が少さく寫されてゐるのみであります。

また近ごろエラスムス、貨狹像の問題がやかましくなりましてから、千九百二十七年にその問題に就て一小册子が和蘭で出版されました。その小册子にもこの五艘の蘭船の繪が立派に掲げてあります。私はこの册子を東京の和蘭公使館のスネレン氏を經て接手し、また次で海軍少將（Rear Admiral）Schorer 氏より惠贈されました。この書名及び著者は次の如くであります。

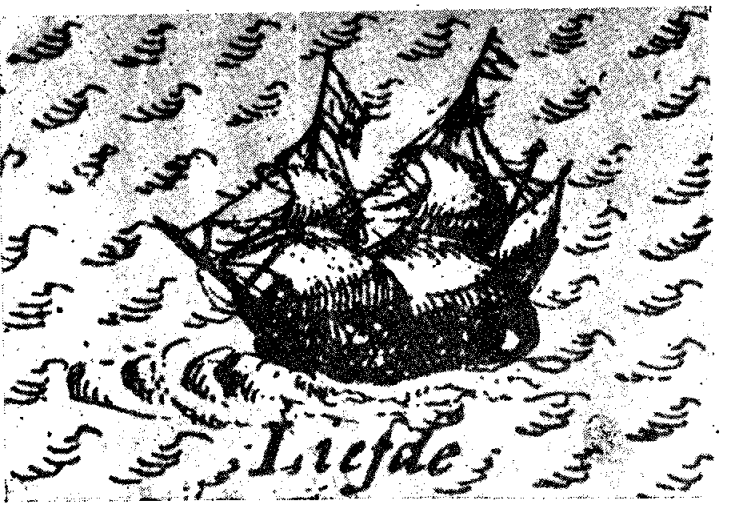
Het Hekbeeld van Het schip de Liefde ex Erasmus in Het Keizerlijk Museum te Tokio door J. W. van Nouhuijs Directeur van het Museum voor Land-en Volkenkunde en het Maritiem Museum "Prinz Hendrick" Te Rotterdam

この和蘭ロッテルダムのプリス、ヘンドリック海事博物館兼、土俗民俗學博物館長ナウホイス氏著「東京帝室博物館保存前名エラスムス號變名リーフデ號船尾裝飾像（Het Hekbeeld Van het Sch de Liefde Ex Eroswus in het Keizerlijk Museum te Tokio）」と題する小册子の第十三頁に次の如く書いてあります。

In het Indisch-Spaansch archief te Sevilla zijn vl. de verhooren gevouden die in December 1599 te Callao door den onderkoning van Peru, Don Luis de Velasco, Persoonlijk werden aufgenomen aan zes schepelingen van "Het Vliegend Hert", die daarheen met dit schip waren overgebracht.

（附錄）五艘の蘭船の一ッなる福音號（De Blyde Bootschap）は以前 "Het Vliegend Hert" 即ち「飛ぶ鹿」即ち英語の Stay-beetle カブト蟲と稱し其カブト蟲が船に刻まれてあつた事は Wieder の書物にも書いてあります。

Niet alleen dat in de verhooren van die Schepelingen, het bewuste schip afwisselend met den naam Erasmus en met den naam De Liefde wordt aangeduid, maar een van he, Pieter Jansz., lichtmatroos, vermeldt Uitdru Kkelijk, dat het schip op den spiegel (lees: boven den spiegel, dus tegen het hek) droeg: "het beeld van een geestelijke met een bock in de hand, dat Erasmus zou voorstellen"



第二圖　慈愛號の圖

第三圖　エラスムス（貨狄樣）の像

村上直次郎博士は主としてこの小册子を參考せられ、また同博士の依頼により私からも Dr, F, C, Wieder 氏の著述中 Erasmus 號即ち Liefde 號である事を立證すべき一節を抜書して御送り致しました事がありますそれやこれやで村上博士は前年史學雜誌に寄せられた『龍江院の貨狄樣に就いて』を訂正する意味で『再び龍江院の貨狄樣に就いて』と題し、史學雜誌第三十八號第九號に一文を寄せられました。その文の一節に私が前に引用しました I, W, Van Novhuis 氏著小册中の一節に基き書かれたと思はるゝ如き次の一節があります。それは重要なる記事でありますから、こゝに村上博士の文の一節を引用して置きます。

一五九八年の艦隊のリーフデは始めエラスムスと稱へた。同船の僚船ブライデ、ボートスハップ（Blyde Bootschap）が多數の乘組員死亡に依つて航海を續けられず、チリ國バルパライソ港に入つてイスパニヤ官憲に投降した後、ベルー總督ドン、ルイスデ、ベラスコが一五九九年十二月同船の乘組員數名をカリヤオ（Callao）で審問した調書がセビーアの印度文書館に保存してあつて、これに船員等が同航のリーフデをリーフデともエラスムスとも稱べてゐたこと、またピーテル、ヤンスゾーン（Pieter Iansz を指す）といふ水夫は「司令船はエラスモと稱しエラスモであるといはるゝ僧形の像が船尾にあつた」と陳述したことが揭げてあるといふとである。それでリーフデと改稱の後もエラスムスの彫像が船尾に附けてあつたとは疑ふ餘地がないのである（史學雜誌第三十八編第九號第九百〇八頁參照）

第四圖　エラスムスの肖像（和蘭ロッテルダムにあるハンスホルバイン筆）

日本出版の書物としては、昭和二年五月發行の新村博士著船舶史考といふのに此五艘の關船の繪圖が載せてありますがこれはその序文に書いてある如く私が前述の關書を新村博士に御寵に入れたのを複寫されて轉載されたものであります。

茲に掲げました(第二圖)は南米智利國(Chile)サンチヤゴ(Santiago)の近くの海中に浮べるHoope號の外にLiefde像の號のうち慈愛號(Liefde)のみの繪を擴大して複寫したものであります。Dr, F. C, Wieder氏編著第一卷第百五十九頁の繪圖を御參照下さい。その繪圖にS, Iagoであるのは Santiagoと同じであつて英語のSaint Jamesと同一意義であります。西班牙語譯聖書 La Epistola Universal de Santiago Capitulo I Jacobo, 葡語譯聖書にS, Thiagoまたは單にThiagoであるを御參照願ひます。

さて前に述べました如く、エラスムスの像は船首ではなく船尾(Spiegel, Hek Stern)にあつた船尾像(Het Hekbeeld)であつたことは、Dr, F. C,Wieder氏J, W, Van Neuhuijs氏等の書物に記する如くでありまして、村上博士の第一回の論文(大正十五年七月發行史學雜誌所載「龍江院の貨狄樣に就て」)の推定は誤でありましたが、龍江院の貨狄樣はエラスムスの像に外ならぬことを、早く斷定された村上博士の功績は忘れてはなりませぬ。

足利の龍江院に保存されてをり、今は東京帝室博物館にある所謂貨狄樣實はエラスムスの像(第三圖)は茲に掲げました寫眞の如きものであります。これと對照すべき、和蘭ロッテルダムに在るハンスホルバインの筆になるエラスムスの肖像(第四圖)の寫眞を茲に載せて置きます。(Hans Holbein Von Paul Ganz 第八十六頁掲載 Erasmus の像)

5　第十七世紀の最初の年　西暦千六百年の春に蘭船初めて我國に着し、また英人初めて渡來せり、卽ち日蘭の交通史及日英交通史上記念すべき年也。而してその歲末は倫敦東印度會社(商會)設立特許の日也。

前に述べ來りました如く英人 William Adams は最初は旗艦(Admiralsschip)希望號(De Hoop)の按針航海士(蘭語 Stuurman 英語 Pilot Major)でありましたが、中途副旗艦(Vice-admiralsschip)に轉乘し西暦千六百年の春我國に着しま

した。故ドクトル・リース氏（Dr. Ludwig Riess）はその名著平戸英國商館史（The English Factory at Hirado）中に

Thus on the birthday of the English East Indian Company the English Mariner William Adams who like other Englishmen had been engaged by the more enterprising Dutch Companies had already been for 9 months an exile in Japan.

と書いて居りますが、注意すべき一節であります。しかし Dr, Riess のいはゆる the English East Indian Company なる名稱に就ては誤解され易い恐れがあります。正確なる名稱は governor and Company of merchants of London trading into the East Indies と申します。それを略して the London East India Company とも申します。即ち千六百年の十二月三十一日にいはゆる The London East India Company が設立の特許を得ましたこの會社の title は Governour and Company of Marchants of London trading into the East Indies と申します。

法學博士大川周明氏著、特許植民會社制度研究第一部前期特許會社制度第五章英吉利東印度會社第二節英吉利東印度會社の成立と題するうちに

一五九九年十二月三十一日エリザベス女王は「東印度貿易倫敦商人支配者兼會社」（The governor and Company of Merchant of London trading to the East Indies）即ち彼の「英吉利東印度會社 The British East India Company」に向つて最初の特許狀を賦與したり。

と書いてありますが、これは年が一年誤られてをります、西暦千六百年十二月三十一日と改むべきであります。また「東印度貿易倫敦商人支配者兼會社」なる譯名は適當でないと思ひます。しかしまた適譯は困難であります。大川氏が千五百九十九年と誤記されたのは、この企業が計畫されたのは千五百九十九年からでありまして M, R, Scott の名著株式會社史（Joint Stock Companies to 1720）第三卷の卷末に掲ぐる Division XIV. Statistics of the Chief Joint Stock Companies of England, Scotland and Ireland to 1720 にあつた The Governor and Company of Merchants of

London trading into the East Indies の Date of first mention の部に 1599 とあるはそれがためであります。

次にその The Governor and Company of Merchants of London trading into the East Indies は千七百〇八年より九年に亘り English East India Company に合併し The United Company of Merchants of England trading to the East Indies を組織致しました。(W. R. Scott 氏著株式會社史第三卷第四百六十五頁並に第四百七十八頁參照) 所謂新英國東印度會社 (The new English East India Company) 即ち The English Company trading to the East Indies は千六百九十八年の創立であります。かく單に英國東印度會社と稱しても、そのドレを指すのか判然致しませぬ、正確な名稱により區別して考へねばなりませぬ。千六百年に設立のものはロンドン東印度商會と稱するものであります。

(附註) 1 正確なる名稱は The Governor and Company of Merchants of London trading into the East Indies であります。西曆千九百十年英國ケンブリッヂ大學出版部發行 William Robert Scott 氏は其名著 The Constitution and Finance of English, Scottish and Irish Joint-Stock Companies to 1720. 第二卷外國貿易植民漁業及鑛山業會社 (Vol.II Companies for Foreign Trade, Colonization, Fishing and Mining) PartII. Division I. Joint-Stock Company formed for Foreign Trade. Section V. The East India Trade A.The Governor and Company of Merchants of London trading into the East Indies from 1599 to 1657. と題するうちに千六百年特許 (Charter) を得たるいはゆる倫敦東印度會社 (The London East India Company) に就て次の如く述べて居ります。

The charter was signed on December 31st, 1600. It incorporates 218 persons, whose names are given, as the Governor and Company of Marchants of London trading into the East Indies with the usual privileges of a corporation including the right to have a cowman seal, (W. R. Scott 著 Joint-Stock

Companies Vol. II. P. 92.)

この書は英國の株式會社發達史として最も參考とすべき書物と思ひます。

(附註) 二　次に千九百五年紐育及倫敦 G. P. Putnam's son 發行の John P. Davis 氏著 Corporations, Their Origin and Development とある第五章 Joint-Stock Companies の部に On the 31st day of December, 1600, Elizabeth, "greatly tendering the honour of [the nation], the wealth of [the] people, and the encouragement of [her] subjects in their good enterprises, for the increase of……navigation, and the advancement of lawful traffic, to the benefit of [the nations] Common wealth," granted to George, Earl of sunderland, and two hundred and fifteen others, that they "from henceforth be one body Corporate and polic…… by the name of the 'Governor and Company of Marchants of London, trading into the East India,'" と書いてあります。

(附註) 三　さてこの千六百年設立の所謂ロンドン東印度會社は Regulated Company であつたと W. Cunningham 氏は申して居られます。

英國經濟史の大家故 W. Cunningham 氏の大著英國商工業發達史近世の部マーカンタイルシステム編 The Company had indeed been founded in 1602 as a regulated Company. 3

2. The materials for the history of the Company during the period when separate voyages were organised will be found in Birdwood, First Letter Book of East India Company, XIV

3. The Undertaking was due to a sudden rise in the price of Pepper, from 3 to 6 or 8 shillings a pound, owing to the monopoly of Dutch intermediates. Birdwood, Op. Cit. XIiii (Growth of English Industry and Commerce by W. Cunningham. Modern Times Mercantile System) P. 255

(附註) 四　倫敦東印度會社設立の動機及び其時期に就て C. P. Lucas 氏著「英國植民地の歴史地理」(A Historical

Geography of the British Colonies) 以下の如く書いてあります。

The Immediate Occasion of the foundation of the Company was the fact that in 1599 the Dutch raised the price of pepper from three shillings to six of light shillings a pound. In Consequence of this, certain London Merchants formed an association for the purpose of developing a systematic trade direct with the East-Indies, and on December 31, 1600, a charter was granted to this association under the style of "The London East India Company."

(附註) 五 David Mac Pherson 著 Annals of Commers 以下

Accordingly, on the 31st of December 1600, she granted a charter to George Earl of Cumberland, and 215 Knights, aldermen, and merchants, that, at their own Cost and Charges, shey might set forth one or more Voyages to the East Indians in the country and parts of Asia and Africa, and to the islands thereabouts, divers of which Countries, islands &c. have long sithence been discovered by others of our subject; to be one Body politic and Corporate, by the name of the Governour and Company of Marchants of London trading, into the East Indies……

Sir Thomas Smith, alderman of London, was to be the first governor (Annals of Commerce by David Uacpherson Vol. II. P. 216 但しこの一節は既に千七百八十四年發行の A. Anderson 著 An Historical and Chronological Deduction of the Origin of Commerce Vol. I. P. 449 に書かれたるこの文句の殆んど同一なるにつて A. Anderson の著書を參考した事は明らかであります)

Annals of Commerce by David Macpherson Vol. IV【General Index】 East-India Company の部 1600 Dec. 31, Company Chartered for 15 years (第二卷、第二百十六頁參照)

1613 They settle a factory in Japan. (第二卷第二七四頁參照)

6 倫敦東印度會社への特許 (Charter) に違反して英國王ジエームス一世 (James I) 東印度遠征の認許 (license) を Sir Edward Michelborne 等に與ふ。しかして Sir Edward Michelborne の率ゐたる船 (その航海士 "Pilot Major" は John Davys) と日本船 (Japanese Junk) の乘組員とシンガポール附近ビンタン (Bintang near Singapore) にて衝突す。

William Adams の我國に來着してから約四年餘を過ぎたころ Sir Edwerd Michelborne は千六百〇四年六月十八日英國王ゼームス一世 (James I) より特許 (license) を得て to discover the countries of Cathay, China, Japan, Corea, and Cambay, and the islands and countries thereto adjoining, and to trade with the people there, notwithstanding any grant or charter to the contrary なる遠征をなすことになり、千六百〇四年十二月五日その途に就きました。その航海士 ("pilot-major") は John Davys で船は Tiger 及 Tigers Whelp と稱しました。

John Davys はエリザベス朝の大航海家の一人であつたが、シンガポール附近ビンタン (Bintang, near Singapore) にて日英人突衝の犧牲となつて倒れました。

英國王ジエームス第一世 (James I) のこの遠征の認許 (license) が、エリザベス女皇の御代西曆千六百年設立の倫敦東印度會社の特許に違反する事に就ては A. Anderson 氏の大著 The Origin of Commerce 第一卷にこれを論じてをります。また David Macpherson の著述 Annals of Commerce にも相似た記事があります。

(附註) 一 A. Anderson 著 the Origin of Commerce 第一卷第四百六十七頁には A grant of King James for another

East-India Company, though Contrary to the Charter of the East India Company なる理由のもとに禁ぜられたるものなり。

In the sixteenth Tome, P. 582, of the Faedera, we find a License and Protection from King James 1. "to Sir Edward Michelborne and his Associates, to go with their Ships on the Discovery "of Cathania, China, Japan, Corea and Cambaya, and Isles thereto belonging, and to trade with the said Countries and People, (not as yet frequented and traded unto by any of our Subjects or Peoples) without Interruption; any Restraint, Grant, or Charter to the country notwithstanding. "This License was probably well paid for to a King always profuse, and ever necessitons, since it is directly cotradictory to the Clause in Queen Elizabeth's Charter of Incorporation to the East-India Company, Anno 1600 viz. "None of the Queens Subjects but the "Company, their Servants or Assigns, shall resort to India, without being licensed by the Company, upon "Pain of forfeiting Ships, Cargoes, &c." Yet he and Captain John Davis went, in this same Year, with one Ship and a Pinnance to Bantam; but (according to Purchas) performed nothing memorable.

(A Anderson, the Origin of Commerce. Vol. I P. 467)

(附註) 11 An Historical and Chronologial Deduction of the Origins of Commerce by A. Anderson. の Chronological Index の結論部分に

1604——King James's separate Grant of a Trad ethither, though Contrary to the first Cmopany's Charter, Vol. I, P. 467 の事実上なるものなり。

(附註) 111 David Macpherson 著 Annals of Commerce Vol. II. 第二百四十一頁に Sir Edward Michelborne の事を書きたるものなり。

The King gave license to Sir Edward Michelborne and bis associates, to go with their ships

以上は A. Anderson 著 Origin of Commerce Vol I. P. 467 に記する處より同じである。

(附註) 四 マルドランク氏著日本史には次の如く此の事件を書いて居る。

The English Government had meanwhile commissioned Sir Edward Michelborne to discover the Countries of Cathaia, China, Japan, Corea and Cambaia and to trade with the people there, notwithstanding any grant or charter to the contrary. This expedition, so Complete a failure that the "Company" preferred to drop the suit in Admiralty it had instituted against Michelborne, is mainly remarkable for the circumstance that it brought about the death of one of the great seamen of Elizabeth's time at the hands of — Japanese! When Michelborne had sailed on December 5th, 1604, he had taken with him as his "Pilot-Major" the illustrations John Davys, who had given his name to the strairs between Greenland and the American Mainland, and in the Course of the piratical enterprises that marked the Course of the voyage of the Tiger and the Tiger's Whelp, an attempt was made on a Japanese junk at Bintang, near Singapore.

Michelborne speaks of "The Japons as not being sufferred to land in any port of India with weapons, being a people so desperate and daring that they are feared in all places where they come; "and he now had an opportunity of tasting their quality. The Japanese, who fought, strange to say, in the utmost silence, did terribles execution with their swords, and among others Davys lost his life in the grim affair. (Murdock 著 A History of Japan Vol. II. Chapter XIX PP. 579-580)

(附註) 五 Captain M. D. Kennedy 著 Some Aspects of Japan and Her Defence Forces には次の如く書いて居る。

From what Michelborne stated in his report on his return to England, it would seem that this was by no means the first encounter between English and Japanese, for he speaks of "The Japons not being suffered to land in any port of India with weapons, being a people so desperate and daring that they are feared in all places where they come."

（同書 P. 5 參照）

（附註）六 Dictionary of National Biography Edited by Leslie Stephen and Sidney Lee Vol, V. Iohn Davys 及び Vol. XIII Sir Edward Michelborne の部參照

7 我國史上其名を留めし我國渡來の最初の英艦クローブ號（"Clove..）と其艦長ジョンセーリス（Captain John Saris）

The Governor and Company of Merchants of London trading to the East Indies なる title のもとに西曆千六百年（我慶長五年）十二月三十一日エリザベス女王の特許を得て設立されました所謂舊東印度會社一名倫敦東印度會社（The Old or London East India Company）は南洋貿易を開くに至りし以來、機會を見て、我日本との貿易を開始する希望を有して居りましたが其會社の船クローブ號（clove）が始めて我平戸に入港しましたのは西曆千六百十三年（我慶長十八年）六月十二日でありました。即ち我國東土に其名を留めました最初の英人 William Adams（三浦按針）の渡來より約十三年後に英船クローブ號が我國に渡來したのであります。この英船クローブ號（今は Clove と綴りますが古文書には Cloue と綴つてあります）の名に就て一言說明致します。

このクローブといふのは丁子（今は Cloves と綴りますが古文書には Cloues）といふ意味であります、今日から見れば大變妙な船名であります。かゝる船名は現今は最早日本にも西洋にもない乎と思ひますが、この名稱は我國では今でも生藥屋の名に丁子屋として殘つて居るものがあるかと思ひます。（開國文化展覽會場中高島屋の樓上に陳列された堺の商店の看板參照）又私の鄕里尾張津島も丁字湯、又丁字屋と申す饅頭屋がありました。又生藥屋には現今でも丁子は賣られて居ります。今晩の講演會の聽衆のうちに我長崎高等商業學校の卒業生で當大阪に於て乾物商を營んで居られます黑川君の店でも丁子を取扱つて居られる關係上私は同君に尋ねました處同君の答に丁子は當今香港から輸入されるこの事でありま

す。

兎に角この丁子は生藥屋、乾物屋等にて賣られ藥用食料品となつて、西洋でも香ひをつける素となつて居りますが、昔は貿易品として非常に重要なものであつてその名前を取つて船の名といたしましたものと考へます。（The Hakluyt Society 出版 The Voyage of John Huyghen Van Linschoten to the East Indies Vol. II. The 65. Chapter. Of Cloves の部參照）

（又 Shakespeare の Lover's Labour's Lost Act. V. Scll にも Cloues なる綴字で Cloves が出てをります）そのクローブ號といふイギリスの船が平戸に着いたのであります。この船の艦長はジョン・セリース（John Saris）といふ人でありました、キャプテン・ジョン・セーリス（Captain John Saris）と申すのであります。

この人の名は今は John Saris と普通綴つてありますが古き文書には Sayris 又 Sarrys と綴つてあります。船長又は艦長、司令官（"Cheefe Captain and Comander"）と申す資格であります。

さてこの舊英國東印度商會の船クローブ號が平戸に着するまでの經過を極めて簡單に述べますればキャプテン、ジョン、セーリスは舊英國東印度會社の命により右クローブ號を旗艦とし其外にヘクトール（Hector）及びトマス號（Thomas）を率ゐて英國ケント州のダウンス港（Downs）を出帆し東印度に向つたのは千六百十一年の四月十八日でありました。（倫敦ハクルイト協會出版エルネスト、サトウ氏編千六百十三年ジョン、セーリス日本航海記序文第十七頁參照村上直次郎氏校註異國日記抄第百三十四頁には千六百十一年四月二十八日と記す）

而して旗艦クローブ號は翌千六百十二年十月廿四日バンタムロードを投錨しヘクトル號はその前日に、トマス號は十一月十八日に入港しました。ついで翌千六百十三年一月十四日セーリスは前述のクローブ號に搭じてバンタムを出帆し日本に向ひました。

（附註）　村上氏校註異國日記抄には一月二十五日とありますしかし

The Voyage of Captain John Saris to Japan, 1613. Edited from Contemporary Records by Sir Ernest M. Satow.

London. Printed for the Hakluyt Society. 所載ジョン・セーリスの日記には千六百十二年一月十四日の朝吾等はバンタムを出帆して日本に向つたと書いてありますエルネスト、サトウ卿の序文中には一月十五日にクローブ號がバンタムを出帆したと書いてあります。サトウ氏は脚註にグレゴリアン暦（The Gregorian Calendar）の説明をして居ります。キャプテン・ジョン・セーリス航海日記は大日本史料第十二編六十一に拔萃轉載しそれに飜譯文を附して居ります。それにバンタン港出帆の部もあります曰く「千六百十三年一月試寶の爲め、胡椒七百袋を積み込み十四日朝日本に向ひ、バンタン港を出帆せり、乘組員は總て八十一人にして内イギリス人七十四人、イスパニヤ人日本人各一人並に黑奴五人なり云々（大日本史料第十二編之十一第五百二十八頁參照）

而して其英艦クローブ號が我平戸に着したのは西暦千六百十三年六月十二日でありました事は同艦にセーリスと共に搭乘し來りました商人頭（Cape-Merchant）で後に平戸の英國商館長に選ばれましたリチャード、コックス（Richard Cocks）といふ人の書翰に明かであります。それは千六百十三年十一月三十日附平戸にて認めた東印度會社宛コックスの書翰を見ればわかります。其書翰の文句は次の如くであります。

The 12th of June we Came to an ancor in the haven of Firando, in Japan, where the Kinge of the place received us very Kyndlie.

この千六百十三年十一月三十日附平戸にてコックスが東印度會社（The E. I. Co.）宛に認めた書翰中の文句は昭和二年五月二十九日其除幕式を擧行しました平戸英國商館記念碑に刻まれて居ります。其文句は説明するまでもなく

「六月十二日我等は日本平戸港に投錨し同地の王は極めて懇切に我等を歡待せり」

といふ意味であります。

（附註）　このコックスの日記と其書翰集は

Diary of Richard Cocks Cape-Mercant in the English Factory in Japan 1615——1622

With Correspondence Edited by Edward Maude Thompson London Printed for the Hakluyt Society 1883

として出版されて居る其第二卷第二百五十七頁に載する Richard Cocks to The E. I. Company 參照我國にても明治三十二年に飜刻校註版も村上直次郎氏により世に出て居ります。其第二卷に右書翰の一節が載つて居ります。

尙其他、自西曆千六百十一年至西曆千六百二十三年日本在留英人書簡集等も村上村川兩氏の共編されたものがあります。詳なるは長崎高商研究館年報「商業と經濟」第九年第一册所載拙稿「日英交通史料」（一）參照

英艦クローブ號到着の時日に就て村上氏校註異國日記鈔第三十四頁には六月二十一日（慶長十八年五月四日）平戸に着せりと註釋してあります。

3　英艦長セーリスの國書捧呈と家康の日英通商朱印狀それを得るまでのWアダムス（三浦按針）の斡旋

セーリスは平戸に着後使を遣つてアダムスを平戸に呼び寄せアダムスが駿府より十七日を費して七月二十九日に平戸に碇泊のクローブ號（The Cloave, "Clove"）に Saris を訪ねました。（The Voyage of John Saris to Japan Edited by Sir Ernest M. Satow P. 108）セーリスは平戸にてアダムスを四十八日間も待つたそれは使者が靜岡を通り過ぎて浦賀に到り按針の日本側の夫人馬込氏を訪ね安針の靜岡に居るを聞き引返した等の爲めに時日を空費したのであります。これは使者の不注意が原因でありましたがセーリスのアダムスに對する感情は既にこの一事よりしてもよくありませんでした。次にアダムスが平戸にての宿の問題で又々セーリスの感情を害しました。

さてセーリスはアダムス即ち三浦按針其他を一行に加へて、千六百十三年八月六日平戸を出發し駿府及び江戸に登りました。其途中御當地大坂（Osaca）京都（Miako）等も通過し駿府（Surunga, Sumpu, Sorongo）にて家康に謁見し、英吉利國王よりの國書及び賜物を呈しました。それから江戸に到り秀忠（The Shogun Hidetada）に謁し、次で歸途浦賀

(Orougaw ,Urago) に寄り、駿府を訪問して家康の復書並に賜物こ通商貿易の特許狀即ち朱印狀 Charter を受取りました。そして平戸に歸着したのは、十一月六日でありました。御朱印御法度書の文面に就いては、和文の案及び英文の飜譯等異本あり別に考證研究しなければなりませぬ。しかし要するに今日の言葉で申しますれば、關稅を免じ、通商自由、日本國內寄港自由、(free to visit any port in Japan) 又江戸住居の自由を英人に許可し又貿易も許しました。(Ground in the place in Yedo which they may desire shall be given to the English, and they may erect houses and reside and trade there……)

尙又治外法權を與へる樣な文句、即ち「いきりす人之內、徒者於有之者依罪輕重いきりすのの大將次第可申付事」(If one of the English should Commit an offence, he shall be sentenced by the English General (Taisho) according to the gravity of the offence) こいふ樣な意味の文句があつたこ傳へられて居ります。

まだありますが略しまして大要右の如く寬大で、英人に取りて有利な文句がありましてこれまで葡萄牙人も西班牙人も其他まだ曾て他國人の得る事の出來なかつた特權を得ましたる事は全く家康公の信任を得て居りましたウイリアム、アダムス即ち三浦安針の斡旋盡力に因るものこ解釋して差支へないこ思はれます。この特許狀朱印狀の事は日英交通史上特筆すべき事で日葡交通史日西交通史及び日蘭交通史等こ對比して日英交通史上注目すべき點であるかこ存じます。又我外交史上も研究すべき問題かこ思ひます。

(附註) 家康が與へた御朱印御法度書に就ては

(1) 村上氏校註異國日記抄

(2) Thomas Rundall, Memorials of the Empire of Japon in the XVI and XVII Centuries, Notes Y.

(3) History of the English Factory at Hirado (1613—1622) By Dr .Ludwig Riess. Appendix III "The Original Privileges".

(4) The Voyage of John Saris to Japan P. 138
(5) James Murdoch, History of Japan Chapter XIX, The English Factory in Japan (1613——1623) P. 527.
(6) Hildreth, Japan As it was and is, Chapter XXII Saris Journey to Court, P. P. 169——170
(7) Purchas His Pilgrimes Vol. III P. 466
(8) 文學博士辻善之助氏著海外交通史話一七、德川家康の海外交通第三百二十五頁
(9) 大隈伯著開國大勢史第八章英吉利の日本通商開始第百六十二頁以下百六十五頁等參照

9 平戸英國商館の設立と其組織

(其一) ジョンセーリス平戸に英商館設置を決定しリチャード、コックスを其館長としウイリアム、アダムス其他を其館員とす。

英艦クローブ號の艦長("Cheefe Captain and Commander" ッ當時の文書に綴つた) ジョン、セーリス (John Saris ッ普通綴りますが古文書には Sayris. Sairys. ッ綴る)

英商館員は

(1) リッチャード、コックス (Richard Cocks) Captain and Cape- (or head.) Merchant (商人頭)
(2) ウイリアム、アダムス (William Adams) (Pilot Major, Master Pilot 安針、航海士)
(3) テンペスト、ピーコック (Tempest Peacock)
(4) リチャード、ウイカム (Richard Wickham)
(5) ウイリアム、イートン (William Eaton)
(6) ウオルター、カーワーデン (Walter Carwarden)

(7) エドムンド、セイヤース (Edmund Sayers)

(8) ウイリアム、ニールスン (William Nealson)

右の外に平戸英國商館員に加はつたものが二人ありました、即ち次の如くであります。

(9) ジョン、オスターウイク (John Osterwick)

これは蘭人の子孫であります。

(10) リチヤード、ハツドスン (Richard Hudson)

千六百十七年にコックスはこの仁をボーイ a boy と呼んで居ります。其父兄を North-West Passage 探險の航海中に失つて居ります。この年少なる館員を英商館は京都に派し日本語を學ばしめ直接取引の發展を圖る計畫がありました、しかし其際葡英貿易を平戸に限定する禁令が出ました (西暦千六百十六年十二月我元和二年十一月) (1) のリチヤード、コックスの名は千六百年十二月三十一日東印度會社の特許狀 (The Charter of in Corporation of the East India Company. 31 Dec. 1600) に出てをります。

A Certain Richard Cocks は千五百七十八年に Meta Mcognita への第三次航海中に Frofisher の名と共に出て居りますがそれは多分親戚のものであると思はれる。Edward Maunde Thompson 氏編コックス日記 (Diary of Richard Cocks) の序文 (Preface) に書いてあります。コックスの平戸英國商館長時代の日記とそれに附錄 (Appendix) としてコックスの書翰を集めたものが倫敦の The Hakluyt Society より出版され我國にても明治三十二年にこれを飜刻し註釋を附したものが出版されて居ります。

右館員中 (3) テンペスト、ピーコック (Tempest Peacock) 及 (6) ウオルター、カワーデン (Waiter Carwarden) は館長コックスの命により生絲及び絹物類の仕入の爲め交趾に赴くべく日本船の長崎より出帆するものに便乘して慶長十九年二月交趾に向ひましたが交趾で殺されました、コックスが生絲及び絹物類を仕入れんとしましたのは當時我國に於て最も

需要多かつたからであります。セーリス等英人の最初我國に持つて來た南洋の貨物は賣行がよくありませんでした。それでセーリスは千六百十三年十二月五日平戸を去るに先ちジャンク船を遣羅及びペクニに特派する事を命じ置きましたが其後コックスは右の如く變更したのであります。

(4) Richard Wickham

(5) William Eaton

(7) Edmund Sayers

等の事は後に平戸英國商館の日本内地各地貿易の事を御話する時に夫々の任務を述べます。

第五圖　平戸英國商館記念碑（昭和二年五月十九日除幕式平戸の行碑記念碑商館國英戸平の行碑記念碑商館國英戸平の行碑記念碑商館國英戸平

平戸英商館の各地支店及代理店制度の採用は場所的不利を減少せしめたるが如き事なき乎。

平戸英商館の場所的不利の外に英船長セーリスとアダムスとの人の和を缺きし事の不利。

アダムスを信任せし家康の薨去、平戸に於てアダムスの死、其他平戸英商館員の死亡の爲めの英商館の損失。

コックス日記の編纂者 Edward Maunde Thompson が其序文中に述べた如く第十七世紀の first quarter に於る我平戸英商館史は失敗の歴史でありました。其原因の一つは平戸の如き場所的に不利な地に商館 (Factory) を置た事でありました。

平戸の地は京坂及び江戸の如き大都市を距る事遠き西陲の一小島で同じ平戸には強敵和蘭商館をひかへて居りました。又近くの長崎には葡萄牙人が根據をすゑて居りました。若し家康及び其信任を得たるウイリアム、アダムス (三浦安針) の忠告に從ひセーリスが關東の浦賀の如き地に英商館を置きましたならば闘人ホルトガル人等の競爭もなかつたのではあるまいかこの說も生じます。

(附註) 故マルドック氏著日本史に曰く

But the most important Consideration of all would have ben that in Eastern Japan no Portuguese, No Dutch, and but little Spanish Competition would have had to be faced. (James Murdock, History of Japan. Vol. II .Chapter XIX p. p. 588——589)

しかし假に浦賀に英商館を設置して居つたとしても家康の薨去 (元和二年四月十七日) 後同じ年即ち元和二年十一月八日 (西曆千六百十六年十二月十六日) には平戸侯及び英蘭兩商館長は江戸城内に招かれ英蘭兩國貿易は平戸及び長崎に限るべき旨老中より命令が傳へられました事英商館員の如き外國商人の直接取引の禁止された事等を考へますれば浦賀に商館設置の運命も短かゝつたものとも考へられます。

又平戸の有利なる點即ち長所は當時歐洲より日本に來る船には距離の上から見て近く便利で又支那との貿易關係開始を期待し重要視して居つた英國船にとりては平戸は距離的に支那に近いといふ事も考へられます。平戸は英商館設置以前よ

り早く海外に有名で歴史的に朝鮮、支那との交通あり又ポルトガル商船は天文十九年（西暦千五百五十年）既に我平戸に來て居り後ポルトガルとの貿易は永祿五年（西暦千五百六十二年）横瀬浦に移りましたが永祿七年大村領内の叛亂佛教徒の横瀬浦を燒拂ひました、永祿七年に葡船が再び平戸に參りましたが、平戸侯隆信がカトリック教に冷淡であつたから宣教師は大村侯の領内にポルトガル貿易を移す考へで永祿八年福田浦に向はしめました。其後ポルトガル船は福田、口ノ津志岐の諸港に出入し元亀元年（西暦千五百七十年）福田浦を經て長崎に入り其後長崎をポルトガルの貿易の根據地としたのであります。

前に述べました如く、日葡交通は宗教的交通が重要でありましたから宗教的交通の多く望まれない港や地方をばカトリックの宣教師は避けて他に移る方針に出でましたから、平戸より去り他に轉じ、遂に長崎港をポルトガル人は根據地として宗教的交通及び經濟的交通の行はれた事は當然であります。反之經濟的交通を念とした蘭人及び英人との交通即ち日蘭交通及び日英交通が平戸を中心として行はれ、平戸領主松浦侯が基督教に冷淡で宗教的交通を念とせず、經濟的交通を重んじ或は鐵砲の如き軍需品の輸入又製作を重んじた其傾向と相投合するものがあつたと觀る事が出來る乎と存じます。されば日蘭關係も日英關係も平戸では良好で松浦侯との社交的交通も圓滿でありました。

特に英國側と平戸の領主松浦法印鎭信（Foyne Sama, Foine Sama: Matsuura Hoin, Kinge, King of Firando, ould King, Old King.）及び松浦肥前守隆信（Figena Sama, or Figeno Sama, Young King, King of Firando）等又士民との社交的關係は頗る親密でありました。今を去る三百年前日英親善が西海の一小島たる平戸で行はれたのであります。

（附註）一　Edward Maunde Thompson は其編纂した Diary of Richard Cocks の Preface に次の如く書いて居ります。

The Social relations of the English with their Japanese Neighbours were on the whole friendly. Periodical exchanges of presents and Courtesies were the rule……

又千六百十二年十一月三十日附平戸より倫敦の東印度會社宛即ち "The Governor, Deputy, Committees, and

generality of the East India Company of England, in London 宛の Richard Cocks の書翰の一節に次の如く書いてあります。

Anchored at Firando 12 th June, where the King received them very Kindly.

（附註）二　平戸の領主が英艦の始めて平戸に來た時に英艦長セーリス以下を厚遇した事は平戸に英商館を設置する事に決定した事に重要なる關係がありますが、英國のみならず其前に平戸に商館を設立した和蘭も亦家康より浦賀に商館設置をすゝめられたが應じませんでした。

さて西暦千六百十三年夏六月（慶長十八年五月）平戸に來ました英艦長セーリス（Saris）は平戸英商館の基礎をすゑて同年十二月五日日本を出發歸國の途に就きました。

しかし英船初渡來以後英商館創立當時より茲に不幸不利な事はセーリスとアダムスとの精神的不一致でありますセーリスとアダムスとは最初より氣が合ひませんでした。アダムスが Clove 號に搭じて歸國しなかつた理由として "Some discourtesies offerd me by General" とアダムスは書いて居ります。このセーリスとアダムスとが意氣投合しなかつた事も英國商館の設置又其經營上不利でありました。

コックスはセーリスの忠告に從ひ平戸の Chief factory の外に二つの branch factories を設置しました、一は大阪で William Eaton の下に他は江戸に Richad Wickham の下に管理されて居りました、第三の支店は短命でありました。千六百十四年末にはだゝ大阪と江戸のみに支店がありました。平戸の英商館本部（Chief factory at Hirado）及び他の二支店に夫々從屬する代理店（sub-ordinate agencies）が各地にありました。長崎の代理店（agency of Nagasaki）は平戸に從屬して居りました。

セーリスの日本を去りて後平戸英商館長コックスは William Eaton を大阪に常在せしめ京都（Miaco）及堺（Sakai）の間を往來して商賣をなるしめ Richard Wickham を駿府及び江戸に派し Edmund Sayers を九州の北部對馬（Tsushima）に派

し胡椒（Pepper）其他の商品を持參せしめて朝鮮この通商を計らしめましたが不成功に終りました。英國商館は大阪及び江戸の如き都市でさへも特別の建物を持つて居りませんでした。

Cuemon Dono をコックスは Our host of Osakay, Cuemon Dono. と書いて居ます。（Diary of Richard Cock 中千六百十六年十一月二十一日の條其他參照）

host at Osakay, Cuimon Don とも書いて居ります。（コックス日記千六百十六年十二月二十九日の條參照）

大阪支店（The Osaka branch）には二つの永續的代理店（two permanent agencies）がありました。一は堺（Sakai）で日本の商人 Tozayemon Dono（host at Sackay）であります。この仁は英人のよき友（Good friend of the English）であつたとコックスは其日記に書いて居ります。他の Sub-agency は京都にありまして Magazaemon の所管でありました。時としては伏見（Fushemi, Fushimi）に特別の代理者（special agent）が任命される事もありました。

江戸の Agency に次ぐものは The Nagasaki Agency でありました。當時長崎は葡萄牙貿易の中心で又カトリック教が盛んでありました。長崎における代理店（The Agency of Nagasaki）は平戸英商館本部に直屬し其第一次の代理店主（first host）であつた Andrea と呼ぶ Japanese Christian はコックスの信用を失した後は獨立した外國商人（independent foreign traders）であつた人々が English depot を管理して居りました。即ち第一にスペイン人 Spaniard John de Lievana 及イタリア人 Italian Damian Marina 後にポルトガル人 Portuguese George Durois 又時としては蘭人 Duchman Melchior van Santvoord が其任に當りました。蘭人 Melchior van Santvoord はアダムスと共に蘭船リーフデにて西暦千六百年四月豐後に到着した一人であります。英商館の爲めに更に一つの不幸なりし事は元和二年（西暦千六百十六年）家康の薨去でありました。アダムスを信任した家康がなくなつたのであります。

英商館（the English factory）不運の他の一つは英商館の頼みとした人々の死亡でありました。その第一は支那貿易の特權を得んとした支那人 Whaw の死でありました。次に千六百二十年三月に商館員 Nealson の死んだ事、それから我元和

六年四月二十四日（西暦千六百二十年五月十六日）William Adams の平戸における死でありました。（Diary of Richard Cocks の Preface 參照）

（附註） W、アダムスの死後六日平戸にて作られた遺產目錄（Inventory）に

"In the Name of God, Amen. 1620, May The 22nd day. The Inventory of the Estate of The Deceased, Capt. Wm. Adames, taken at Firando, in Japan. (Memorials of the Empire of Japan by Thomas Rundall p. 88)

And our good friend Capt. Wm. Adames, who was so long before us in Jopan, departed out of this world the 16th of May last, and made Mr. Wm. Eaton and my self his overseers- (Richard Cocks to the E. J. Company. Firando in Japon. the 13 th of Deccember. 1620 以上コックス日記飜刻本第二卷 p. 321 參照）

アダムスが平戸で死んだ事を早く立證した人はドクトルリース氏であります。同氏著平戸英商館史參照。

10 英蘭兩國の東印度會社の競爭と聯合

特に英蘭防禦同盟（the Union of the English and Duch Companies "Treaty of Defence" between the English and the Dutch)

私はこれから主として千六百十九年歸結の英蘭防禦同盟の事を御話するはずでありますが少し遡つて英蘭兩國（東印度會社）の南洋又我國への發展競爭に就て概說して見る方が順序として適當ではあるまいかと思ひます。

英國の恐るべき眞の敵（競爭者）は葡萄牙ではなくむしろ和蘭でありました。英國人は和蘭人と略同時代に印度貿易に注意するやうになつたのであります。しかし和蘭の方がその發展が優越して居りました。

和蘭の個々の separate Adventurers が Consolidate 卽ち聯合しました大なる和蘭東印度會社の設立されましたのが千六百二年で聯合東印度會社（vereenigde Oost Indische Compagnie）と申しました。それが非常に發展活躍しました、我國へは

英船の渡來よりも早く蘭船が來て居り、その最初のものは先に述べました、千六百年に來た蘭船リーフデ號でありますがそれはこの聯合東印度會社成立前の事であります。その後千六百九年（慶長十四年）蘭船赤獅子號こフリフーン號こが平戸に參りました。そこで平戸に和蘭東印度會社が商館を設置する事になりました。

（附註）　此等蘭船赤獅子號（蘭語 Roode Leeuw 即ち英語にては the Red Lion 又獅子矢を持てる故 Leeuw Met Pijlen 直譯すれば矢を持てる獅子こ稱せり）及びフリフーン獵（Griffoen 英語 Griffon）こ葡船 Madre de Deos この關係に就いては和蘭海牙文書館文書を引用せる大日本史料第十二編之六第四百五十七頁以下を統引して拙稿「慶長十四年長崎に渡來の葡船 Madre de Deos こその大砲」（日葡協會雜誌第十一輯「日葡交通」掲載）中に述べて置きました。又此論文は日葡交通關係、日葡衝突の由來を研究したものであるから日蘭交通こ異つて居る點を知る上に間接に參考こなるこ思ひます、又此論文において取扱ひました昭和三年八月長崎港外海底より引揚げられました大砲は開國文化展覽會にも出陳されて居りましたから、その點からも參考になるこ思ひます。故に附註こして譯演中に申さなかつた事ながら茲に書き添へて置きます。

和蘭商館の平戸に置かれたのが慶長十四年（西曆千六百九年）でそれより約四年後の慶長十八年即ち西曆千六百十三年に蘭船が平戸に參りまして商館を置く事こなりました。兩國商館員は社交的には表面は親密ではありましたが經濟的には競爭が行はれました。

蘭英兩國人の競爭は平戸においても行はれましたが、西洋では一層激しく蘭人は英人を驅逐せんこする勢でありましたから英國側の東印度會社は本國政府に訴へ英國王ジエームス一世（King James I）に "Of the Manifest and insupportable wrong and Abuses lately done by the Hollanders Unto Your Majesty and Your Majesty' ssubjects in the East Indies" なる Statement を呈送しました。（Calender of State Papers　No 425 リーズ氏平戸英商館史第六章參照）

依て英政府は和蘭首府ハーグに駐在の英國大使（English Ambassador）に調合して和蘭の政府に抗議せしめました。ジエ

ームス第一世の政策（the Policy of King James）はだゞその人民の受けたる損傷の回復を企圖するに止まらず the States-General 及び the deputies of both Chartered Companies と共に "for the preservation and increase of navigation and traffic in the East Indies" を目的とする條約（treaty）を締結する考へでありました。最初は和蘭東印度會社（the Dutch East India Company）はその競爭者たる英國側の要求に耳を傾けませんでしたが遂に "Treaty of Defence" 即ち兩國防禦條約が千六百十九年六月二日倫敦にて締結せられ同年七月十六日ウエストミンスターにて又同年八月十六日和蘭東印度會社にて批准されました。而してその報知が二ケ月後バタビアに參りました。そして實行方法が議せられました。

この條約によれば蘭英兩國の東印度會社はモロッコ島（Moluccos）では組合（Partners）としてて商賣をなし、香料（Spices）の三分の二（two-thirds）は蘭人、殘三分の一は英人の所得となし又兩國より十二隻の船を提供して以て "Fleet of Defence" を編成しました。そしてポルトガル人又はスペイン人若くは彼等の與黨 their adherents を襲擊し捕獲物（prizes）は平戸にて英蘭兩商館において平等に分配する事となつて居りました。

かくの如く英蘭兩國人は葡萄牙人及び西班牙人に對抗する爲めに一旦は結合し英蘭防禦同盟（the Union of the English and Dutch Companies）を結びました、即ち The Anglo-Dutch Alliance が成立しました。かくて英蘭聯合艦隊は Fleet of Defence の名の下に航海し媽港（Macao）及び呂宋（Luzon）の貿易を阻止しポルトガル及びスペイン植民地を威嚇する目的を有してをりました。

換言すればスペイン及びポルトガルの港（The Spanish and Portuguese Ports）を封鎖（blockade）する計畫でありました。依て例へば支那商船の日本に來るものは見のがしますけれども支那商船のフイリッピンに向ふもの又はフイリッピンより來るものを途中發見した場合には捕獲致しました、そして支那とフイリッピンとの貿易を蘭英兩國の Settlement に移さんとする計畫であつたのであります。即ちジャバに移す計畫でありました。かく平戸は一時英蘭聯合艦隊の一方の根據地となりました、他方の根據地はバタビヤでありました。

英蘭防禦同盟成立當時から東洋におけるオランダ人の勢力は遙に英人よりも優れて居り Fleet of Defence の編成にも英國側は常に蘭人側を滿足せしむるが如き協力を爲す事が出來ず、千六百二十二年オランダ人は支那貿易開始の爲めに單獨に十五艘の大船隊（A force of 15 big ships）を以てマカオ（Amacau）を攻擊しましたが成功しませんでした。乃ち澎湖島（the Pescadore Is）を占領する事となりました。

（附註） Dr. L. Riess 著平戸英商館史第七章第百〇三頁

C. A. Montalto de Jesus 著 Historic Macao, のはじめ The Dutch invasion and rout なる見出の下に P. 82 に

Meanwhile a powerful Dutch expedition was on the way for the Capture of either Macao or the Pescadores…… なる部分參照。

かく英國會社と共同作戰を爲す事が出來なかつたから遂にバタビアにて聯合艦隊を解散する事に決定し、千六百二十二年八月（我元和八年七月）解散命令が平戸に達しました。この通達は英國東印度會社のバタビア支店長フアースランド（President Fursland at Batavia）から參りました。又當時平戸に在りました英船五隻をバタビアに向はしむる事をも命じて參りました。同時に平戸商館經費節減、コックス及びイートン、セーヤースにバタビアに歸る事の命令も參りました。その事は次の節で述べます。

（附註） Diary of Richard Cocks, with Additional Notes by N. Murakami p. 331——332

Richard Cocks to the E. I. Company Firando in Japan, the 7 th of September, 1622.

Formosa Under the Dutch by Rev. Wm. Campbell. 村上氏著貿易史上の平戸等參照。

かくて當時日本に來て居りました英蘭兩國の船艦は程なく去りまして平戸の英蘭兩商館は再び競爭狀態となりました。元來當時和蘭東印度會社は英國のそれよりも資本が豐富であつたから和蘭は單獨に市場を獨占せんと企つるに至つたのであります。

二　平戸英國商館の閉鎖、館長コックス以下商館員の平戸引き揚げ

倫敦東印度會社のバタビア支店長（支社理事長）フアースランド（President Fursland at Batavia）は平戸英商館の經費を節約し東印度會社の損失を防がんが爲めにコックスに命じてコックス並びに二人の上役商人（Senior Marchants）Eaton 及び Sayers はバタビアに歸る事とし平戸には Osterwick 及び二人の助手を附して五千兩（5,000 Taels）の資本（Capital）を殘し置くべき事を申して參りましたけれどもコックスは商館の整理上日本に止まる必要ありとして直に此命に從ひませんでした。

然るにバタビアでは翌千六百二十三年五月日本平戸の英商館解散に決しコックス以下全員（Cocks and the rest）に宛てた五月廿二日附の長文の書翰を Richard Fursland の外に Thomas Brockendon, Aug. Spalding 連名にて認め Joseph Cockram を使者としてバタビアより英船 Bull 號に搭じて平戸に向はしめました。コックスが同年七月平戸に着したので千六百二十三年七月二十五日平戸英國商館は會議 Consultation を開き商館閉鎖の命に服する事と決しました（"With all willingness obey"）又 Richard Hudson, an Assistant in the factory 及び通詞（interpreter）Juan Coe を京都に遣はし當時同所に在つた將軍並に老中（The Shogun and his Principal Councillors）に贈物（Presents）を呈し商業上の損失多き故一時日本を引き揚ぐる旨を述べ他日再渡のとき貿易を許可されん事を請はしめました。其際の贈物は以前よりは價値低きものでありました。平戸英商館の財政は惡くなつて居りました、めであります。

商館長コックスは次に貸借關係を整理する事に着手しましたが思ふ樣に始末が付きませんでした、平戸侯は返金されましたが松浦家一統にもその家臣等にも貸が殘り平戸長崎の商人への賣掛金もあり貸金の總額 12821 Taels（About 4000 Biers）に達しました。

平戸英商館損失の大なるものはこの滯納の賃金でありました。就中支那頭人（The Captain of the Chinese Colony at Hirado）Andrea Dittis の借財六千六百三十六テール（6636 Taels）即ち六十六貫目錄の如きは英國が支那との通商の便益（free access to the Chinese Market）を得んが爲めの運動に彼が盡力するといふ條件にて貸したものであつたが、到底取立の見込なきものでありました。コックスは賃金表を作成し、和蘭商館長 Cornelis Van Neijen-Roode に其の取立をする委任權（Powers of attorney）を與へました。コックスはまた遂信及び其重臣に厚く贈物をなして暇乞をしました。

平戸英商館長であつたコックス以下の館員を載せバタビアに向ふべき英船 Bull 號には千六百二十三年十二月二十二日に平戸士民の見送に來るもの多く和蘭商館員も來り集まれるもの百人を超過し、別宴を張るのに船内は狹かつたから河内浦（Kochiura）にて一日を費して其宴を張り別れを惜みました。かくて出帆の日を延し千六百二十三年十二月二十四日（24th December 1623）の正午英船ブル號（"Bull"）はバタビアに向ひました。

12　初期日英交通史上の重要人物アダムス、セーリス、及びコックス等の書翰航海記、日記等の學術的社會史的、文化史的交通史的及び商業史的價値

（其一）　アダムスは日英交通史上の重要人物たるのみならず日蘭交通史上にも重要也又日葡交通史日西交通史並に日本と邏羅との交通史とも交渉あり、彼は我造船技術史又西洋流數學傳來史にも一言さるべき人也。前に述べました如くアダムスは千五百九十八年六月二十七日和蘭のロッテルダム（Rotterdam）を出帆しました。彼自身の手紙にはアダムスは千五百九十八年六月二十四日和蘭のテセル（Texel）を出帆したとありますそれで Texel から Rotterdam に寄港した五艘の蘭船の一つに乘つたものと解されます、而して前述の如く途中難航海をなして遂に千六百年の春我國に着しました。

（附註）　彼が英國に遣した妻宛の書翰（A letter of William Adams to his wife）によれば彼は千五百九十八年六月二

十四日和蘭のテッセル（Texel）を出帆して居ます。其文に曰く

Loving wife, you shall unederstand how all things have passed with me from the time of mine absence from you. We set Saile yith five ship from the Texel, in Holand, the four and twentieth of June 1598.

彼は最初に渡來した英人として我國史に其名を留めました人で日英交通史のみならず日蘭交通史上にも重要な人物であります。（Die Beziehungen der Niederlandischen Ostindischen Kompagnie zu Japan im Siebzehnten Jahrhundert Von Oskar Nachod Bladen over Japan, door J. H. Levyssohn 其他參照）

又日西交通史にも交渉があります。（フィリピン諸島長官（總督）Don Rodrigo de Vivero y Velasco, の日本見聞錄異國叢書中に村上直次郎博士の譯本あり、アダムスに就ては其の第六十八頁及び第六十九頁參照、又この見聞錄の梗概は Memorials of the Empire of Japan Appendix. Summary of a Narrative by His Excellency Don Rodrigo de Vivero y Velasco, Governor General of the Philippine Islands, of His Residence in the Empire: A. D. 1608—1610 に之を載す。又日西交通史上アダムスに就ては Murdoch 著 A History of Japan P. 462 其他參照）

又アダムスは日葡交通史にも交渉があります。アダムスの人物を研究するには英蘭等の側の史料のみならず西、葡、又キリシタン史に關する書物に何ら評して居るかを一應調べる必要もあります、彼を惡しく評して居るものもある事を忘れてはなりませぬ、但し其正しきか否かは別問題であります。

さて彼は我國史又彼の書簡にも自ら記し居ります如く、家康の信任を得まして、外交の顧問であり三浦安針なる日本名を得て江戸の日本橋魚河岸に近き今の安針町（Pilot Street）に屋敷を持ち江戸傳馬町の奉行でありました馬込勘解由（Magome Kageyu）の女と結婚し相州三浦郡逸見村（Hemmi, ロックス日記に所謂 Febe 又は Phebe）に二百五十石の領地を與へられて居りました。逸見は浦賀に近き故コックスは浦賀への途中立寄りアダムスの邸に泊つて居ります。今も相州横須賀市逸見十三畔に安針塚があります。（Letters written by the English Residents in Japan 1611-1623 Edited by N.

Murakami and K. Murakawa 以 Toms of William Adams and His Wife at Hemmi の寫眞を載す)

これ安針夫妻墳墓と稱するものでありますがアダムスの死んだのは前に述べました如く實際は平戸であります。彼は Lima house に十二年間 Apprenticeship として勤めた Shipwright であつたと思はれまして後に航海士 Pilot-major として日本に來たのでありますから、彼の書翰にも書いてあります如く彼は家康には自分は大工 Carpenter ではないと一旦は答へましたが彼が船大工 Ship wright でないと絶對に否定し難き事を吾等に思はしめますのは彼は遂に西洋型帆船の我國における嚆矢とも稱すべき八十噸の船を家康の命により建造し又次で百二十噸の船を設計致しました事であります。

この第二回目に造りました船の建造の場所は伊豆の伊東であつたと傳へられ、アダムスは In this ships I have made a voyage from Meaco to Edo 即ちミヤコより江戸まで航海したと千六百十一年十月二十二日附の書翰に書いて居ります「都とは京都の港大阪或は堺の事なるべし而して同船は其後江戸淺草川に繫留せしを今回、ドン、ロドリゴ等の乘船に當てたるなり」と村上博士はドン、ロドリゴ日本見聞錄に註を附して居られます（同書第六十八頁參照）故に彼は我造船史にも其名を留めたと申すべきであり、造船技術史上彼は忘るべからざる人であります。

又彼は家康に幾何（Geometry）數學（Art of Mathematickes）等を敎へました、されば彼の名は我國における西洋流の數學傳來史にも一言さるべき人であります。されば初期日英交通史は主として經濟的性質を帶び宗敎的ではなかつた事は先に述べました通ではありますが又學術技藝等文化的にも多少日本に影響して居ります事は忘れてはなりませぬ。

（附註）一　Letters written by the English Residents in Japan. 1611—1623 Edited by N. Murakami and K. Murakawa 所載 Letters of W. Adams. Letter No. I. の一節に曰く、

So in proceses of four or five yeeres the Emperor called me, as divers times he had done before. So one time above the rest he would have me to make him a small ship. I anns'eweird that I was no Carpenter. and had no knowledge thereof. Well, doe your endeavour, saith he; if it be not good, it is no matter. Wherefore at his command I buyit

him a ship of the furthen of li ghtic tunnes, or there about: which ship being made in all respects as our manner is, he comming ahoord to see it, liked it very well; by which meanes I came in more favour with him, so that I came often in his presence, who from time to time gave me prsents, and at length a yearly stypend to live upon, much about seuentie ducats by the yeare, with two pounds of rice a day, daily. Now beeing in such grace and favour, by reason I learned him some points of jeometry, and understanding of the art of mathematickes, with other things; I pleased him so, that what I said he would not contrarie.

(同第十一頁參照)

(附註) 二 第一次 the Garter Mission to Japan にロンノート殿下 (His Royal Highness Prince Arthur of Connaught, K. G.) に隨行して我國に來られましたLord Redesdale, G. C. V. O. は其著 The Garter Mission to Japan 中に William Adams の事を書き又アダムスを脚色した The Anglo-Japanese Alliance なる play founded on life of Will. Adams なる Performance のあつた事を傳へて居ります。

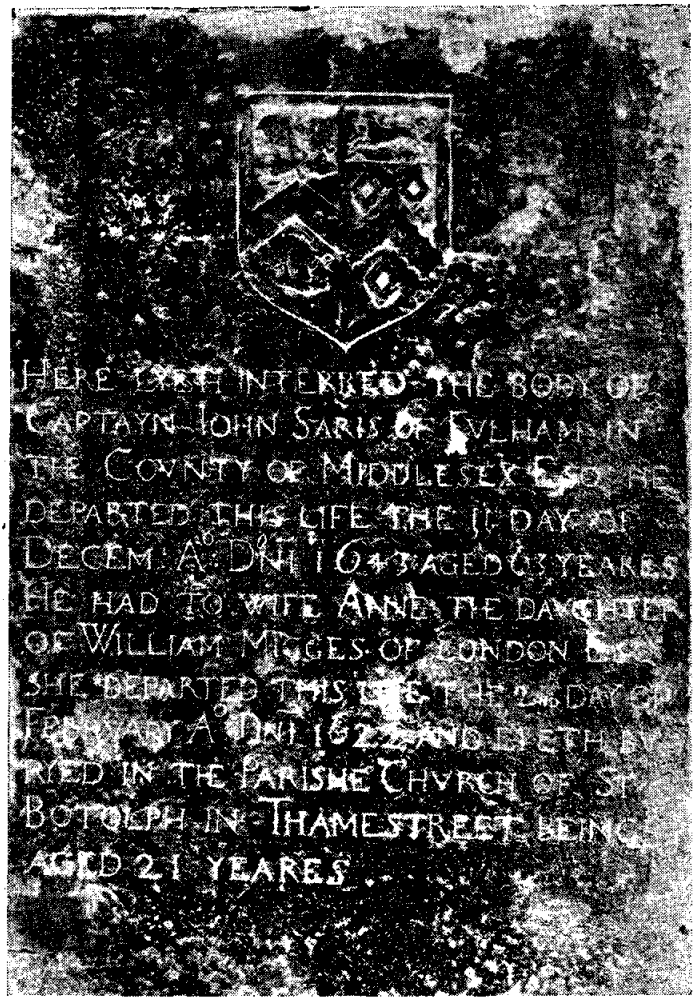
Lord Redesdale はアダムスに就て次の如き講演をして居られます。

"Three Hundred Years Ago" By The Rt. Hon. Lord Redesdale,

(Transactions and Proceedings of the Japan Society. London. Vol. VIII. Seventeenth. Session, 1907——1908)

この講演は相州横須賀市逸見十三峠のアダムスの碑 (Monument of Will Adams) を修繕する基金募集の爲めの講演でありました。其碑の近くには横須賀の造船所があります。造船史に關係あるアダムスにとりては歴史的にも適當の場所であります。しかしアダムスの眞に永眠した場所は平戸であります。大正三年新しく建てられた安針塚碑 (The Monument of Will Adams) に就ては Transactions and Proceedings of The Japan Society London. Vol. XVI. The Twenty-Seventh Session, 1917-1918 に其碑文 (Inscription on the Memorial to Will Adams) の寫眞と共に

説明が載せてあります。
歴史的に色々論ずべき事がありますが、今は略します。



第六圖　我國に最初に來渡せる英國東印度會社の「ブーロク」艦長ジョン・サリス(John Saris)の墓(“Clove”)

（其二）　ジョン・セーリスの航海記とフランシス・ベーコン

ジョン・セーリスは西暦千六百四十三年に亡くなつたのです、日本へきたのが千六百十三年ですから日本にきてから丁度三十年後の六十三歳で亡くなつたのであります、三十三歳の働き盛りに萬里の波濤を越えて日本にきたのであります。當時は非常な冒險であります、現在大阪で英國の領事をしてゐるバスク・スミス（Paske-Smith）といふ人が以前長崎の英國領事をしてゐましたが、この人は歴史研究に熱心でありまして長崎領事時代にこの人が主張しまして英國人などがそれに參加して平戸に英國商館記念碑を建て其除幕式に英國大使 Sir John Tilley 並に夫人なども平戸に軍艦で長崎から行かれました Paske Smith 氏等と共に私も同乘して平戸に赴き除幕式に參列しました。

其後同氏は賜暇を得てイギリスに歸つて居られた間に Captain John Saris の墓の寫眞を手に入れ任地たる我國に持參歸任されました。何れ目下編纂中の同氏の著述の内に加へらるること、思ひますが、私は懇請してこれを昭和四年三月發行の我長崎高等商業學校研究館年報「商業と經濟」第九年第二册掲載拙稿「日英交通史料一（二）」と共に掲載する事を許して貰つたのであります。

この Captain John Saris の墓石の寫眞は未だ他に我學界には紹介されて居りませんでした。但しこの Captain John Saris の墓石の寫眞にある Saris の妻永眠の年齢 Aged 21 years は誤りて刻んだもので Aged 29 years と改むべきである事は Sir Ernest M. Satow 氏の考證（The Voyage of Captain John Saris to Japan, 1613 Edited from Comtemporary Records by Sir Ernest Satow Introduction X The Sabsequent of Captain Saris と題する部分參照）が正しいと思ひます。このセーリスについて私が一言いたしたいのは、先刻植民といふことを申しましたが彼の有名な哲學者ベーコン卿（Lord Bacon）の論文集中第三十三の論文（Bacon's Essays XXXIII）オブ・プランテーション（of plantation）植民について植民論が論ぜられてをります。この哲學者ベーコンの論文集に植民論があるといふことと關聯して私が非常に興味を持つてをりますのは日本に最初に來た英國の船の艦長をしてゐたこのジョンセーリスとの關係でございます。このジョンセーリスがベーコン

卿に贈つた彼の航海日誌が今我東洋文庫の所藏として傳はつてをります事を考へまして、非常に私は興味を持つのでございます、昨晩新村先生の御講演を私は九時に大阪に着きましてすぐこちらに參り途中からきゝましたが、昨晩この席にも來聽されて居りました外國人の方でグリフイス（H. J. Griffiths）ゼー、エル、タムソン（小賣）株式會社（J. L. Thompson & Co. (Retail) Ltd. に居られる篤學の方があります。其方は英國領事バスク・スミス氏と共に熱心なる日英關係、或は切支丹史などについても興味を持つて研究されてをります。其方から私は平戸英國商館記念碑除幕式を早くこの頃既に聞いたのですが、このセーリスがベーコンに獻呈した手稿本が英國にあると言ふ事を知りました、又其人から聞いたバスク・スミス氏からも其前に聞きまして非常に興味をそゝられてをりましたが、私は其後其ベーコンに贈られたセーリスの航海旅行手稿が既に我東洋文庫の所有に歸して居る事を同文庫の目錄 A Catalogue of Books Exhibited in the Toyo Bunko or the Oriental Library on the occasion of the visit of their Royal Highness The Crown Prince and Princess of Sweden. September 14. 1926. The Toyo Bunko, Tokyo により承知しまして私は文獻的に興味を持つたのであります、ベーコンは當時勃興しつゝあつた王權の擁護者、擴張論者でありました。又其論文集中に植民を論じて居ります、倫敦東印度會社の船 Clove 號が日本に派遣され平戸に英商館の設立された事に興味を感ずる人と思ひます、其ベーコンに Clove 號の艦長セーリスの獻呈した手稿航海記が東洋文庫の所藏に歸して居ります。東洋文庫はこれを得る爲めに巨額の金を拂つたといふことであります。この東洋文庫は岩崎男爵家の出資に基く財團法人で、かかる文獻を我東洋文庫の所藏となしたことは非常に尊いことでありまた愉快に感ずる次第でございます。このセーリスの航海記といふものの新しい版はこゝに私も持つて參りましたがそれはエルネスト・サトー（Ernest Satow）氏の編纂したもので、同氏は日本のキリスタン史の研究などが今日の如く流行にならない時に卒先してそれを研究した人で又日英交通史上のこの貴重なる史料をば綿密に註釋を加へて出版してをりますが、しかし最も尊いのはこのベーコンに贈つたところのセーリス自身の手稿であると私は思ふのであります、サトー氏の編纂した The Voyage of Captain John Saris to Japan. 1613. London 1900. はロンドンの Hakluyt Society

から出版されてをります、その航海記を見れば日英交通の初めのことがよく判るのみならず當時の日本の狀態を知ることが出來るのでございます。

セーリスとベーコン關係を研究すべき豫備的知識

（附註）一　The Works of Francis Bacon, Baron of Verulam, Viscount St. Alfan, and Lord High Chancellor of England, Vol. I 所藏 The Life of Francis Bacon, Lord High Chancellor of England by Mallet（同僚谷田教授所藏本に據る）

即ち Mallet 氏稿ベーコン傳中に次の如き一節があります。

Upon the Chancellor's Voluntary resignation of the seals, they were given to Sir Francis Bacon, with the title of Lord Keeper, on the Seventh of March 1617.

しかして東洋文庫所藏のセーリス航海記肉筆は千六百十七年に Sir Francis Bacon に贈呈したものであります。ベーコンの論文集中の Of plantation 其他ベーコンが植民海外發展に興味を持ちました事しかして彼の學問的教養以外に社會的地位に顧みまして極東日本への英船の最初の航海記たる The First Voyage of the English to Island of Japan 1611-13. Original M. S. account written by Capt. Saris 即ち此セーリスの手稿航海記はベーコンが Lord Keeper——Keeper of the Great Seal 國璽保藏官の位にあつた年に贈られたものなりと解すべきであります。

Bacon's Novum Organum Edited with introduction, Notes, Etc. by Thomas Fowler. Oxford, 1889.

即ち西曆千八百八十九年牛津大學出版部出版の Thomas Fowler 氏纂改訂第二版の Bacon's Novum Organum に附す Dates of the Leading Events in Bacon's Life, and of the First Publication of his Principal Writings なるベーコン年譜によれば

Appointed Lord Keeper　　March 7, 1616——17

Appointed Lord Chancellor　Ian 4, 1617——18
Created Bacon Verulem　July 12, 1618
りあります。

倫敦 Frederick Warne and co 發行の Bacon's Essays 卷頭に附する A Brief Memoir of Francis Bacon によれば It was by the influence of Buckingham that, in 1617, Bacon became Chancellor, with the title of Lord Keeper.
りあるゝ、これによれば千六百十七年には Chancellor であつて同時に Lord Keeper であつたと解すべきであります。

Dictionary of National Biography Vol. I. の Bacon の部を見るに
On 9 June he had become a privy Councillor, or 7 March 1617 he succeeded Ellesmere with the title of lord Keeper.
りあります。

A History of English Philosophy by W. R. Sorley によればベーコンは Lord Keeper には千六百十七年に Lord Chancellor には千六百十八年になつて居ります（同書第十六頁參照）

（附註）二　福田博士著經濟學考證第八編英國の學問としての經濟學殊に商國主義の始終第二章「ユユマニスト」よりベーコンに至る英國勃興時代の經濟論

（附註）三　W. Roscher 著英國經濟學史論（Zur Geschichte der Englischen Volks wirths chaftslehre）IV. Bacon von Verulam として Francis Bacon von Verulam を論じたる部分

Von ganz besonderem Interesse muss es fur unsern Zweck sein, die Nabionaloe Konomischen, Ansichten des Francis Bacon von Verulam kennen zu lernen. Bei der ebenso vorurtheils freien, wie grossartigen vielseitigkeit dieses Mannes, welcher erustlich bemuhet war, das ganz Gibiet menschlichen Wissens Klar zu beherschen und durch sichere Beobachtungen zu

erweitern, lasst sich schon erwarten, dass nichts von Demjenigen, was die Zeitgenossen als Wissenschaft auffassten, seinem Gesichtskreise völlig fremd geblieben.……

Als die Krone aller Volkswirthschaftlichen Ansichten Bacons muessen seine Betrachtungen De plantationibus populorum gelten. (Sermones Cap. 33.)……

Die gange Kolonialtheorie des Bacon steht im schaerfsten Gegensatze dem Verfahren der Spanier. (Zur Geschichte der Englischen Volkswirthschaftslehre. Von Wilhelm Roscher. S. 36. 42.)

(其三) 平戸英商館長コックスの日記

前に述べました如くコックスは商賣に失敗し日本平戸よりバタビアに呼び戻され同地に着した後東印度會社より取調を受け會社に多くの損失を及ぼしたる事を譴責せられ老年の故を以つて罰を輕減せられ本國に歸る事を許されたのでありますがコックスは歸國の途中の航海中三月二十七日永眠しました。

かく彼の最後は悲慘でありました。彼は性格に缺點はあつたが正直でありました。彼は貧乏であつたが精細有益な興味多き日記が殘されました。それは歴史的に價値高きものであります。

(附註) Diary of Richard Cocks の編纂者 Edward Maunde Thompson 氏は其序文中に曰く

But he (Richard Cocks) was perfectly honest; he died poor; and his very weaknesses render him a not unamusing diarist.

平戸英商館長 (Captain of the English factory in Firando) リチャード、コックス (Richard Cocks) の日記は西暦千六百十五年六月一日 (我慶長二年五月十五日) より千六百二十二年三月二十四日 (元和八年二月二十六日) に至る日記でありますが、其内千六百十九年一月十四日より千六百二十年十二月五日まで二十二ヶ月二十二日間の記事に脱落があるけれども當時の日本の交通史社會史經濟史上參考となるべき記事が多くあります。コックスの平戸に持つて來て居りました藏書には次の如きものがあります。

彼はトルコ史（Turkish History）の本を持つて居りました。それは多分 The Mohumetane or Turkish Historie by Ralph Carr, 1600 であつたと思はれます、又聖オーゴスチンの City of God を持つて居りましたそれは St. Augustine, Of the cities of God, with the learned comments of Jo. Lod. Vives Englished by I. H. 1610. であつたと思はれます。

彼は又英文の Essaies を Raphe Wilson から受取つて持つて居つたこの事であります。（彼の日記千六百十七年一月九日の條參照）又彼は Chancellor の a Canterbury Tale 等を話して居ます（千六百十七年七月二十一日の條參照）

又 Edward Maunde Thompson 編纂 Diary of Richard Cocks Vol. I. Preface 參照）

（附註） 若し其所謂 Essaies なるものが Bacon's Essays であつたならば眞に興味深いことゝ存じます、これはたゞ私が想像を逞うして申すまでゝあります。Bacon's Essays は千五百九十七年に第一版が出で改訂第二版は千六百十二年に第三版は千六百二十五年に出版されて居ります、されば第二版までは當時我國に輸入されることが出來たはずであります。しかし若しベーコンの論文集が輸入されたとすれば其名が明示されたはずであります。單に Mr. Raphe Wilson gave me an English book Called Essaies とコックス日記（Diary of Richard Cocks.）中に書かれてあるのはベーコンの論文集でないかも知れませぬ。

以上西洋の文獻の傳來史的興味から想像を混じまして述べて見た次第であります、次にコックスが琉球（Liquea Loockoos Lin Kin Isles）より Potatoes をはじめて我日本の平戸に移植したことも食糧の歴史農産史上注意すべきであります（飜刻本コックス日記第一卷第十一頁 First planting of Potatoes in Japan の部又第二卷第五十九頁參照）コックスは園藝（Gardening）の趣味のあつた人であります。小動物も愛しました、コックスは其 Garden に Potatoes を移植したと書いて居ります、琉球では Potatoes の花は綺麗に咲くと云ふ事ですから花を賞する意味も含まれてあつたかも知れませぬ、これは私の想像であります、彼は實利主義のみの人でありませんから此の如く想像したのです。コックス及びコックス家子孫に就ては

（附註） A Glympse of The "English House" and English Life at Hirado, 1613-1623.
by M. Paske-Smith. Kobe 1927.
Chapter VIII. Richard Cocks の部又同册千揭載の His Excellency Arthur Cocks, Lord Somers, Governor of Victoria, Austlia, descended from Richard Cocks, Captain of the English in Japan 1613 to 1623. の小照參照

（其四） 海洋探檢旅行文學の出版と其内に加へられたるアダムス・セーリス及びコックス等の旅行記

さて以上述べ來りましたリチャード、コックスの日記は其の前に述べましたジョン、セーリスの日本航海記と同じく The Hakluyt Society と申す倫敦の協會から出版されて居ります。この Hakluyt とは有名な英國海上探檢文學（The literature of English Maritime discovery）の開拓者（pioneer）の一人である Richard Hakluyt（1552?-1616）の名をとりたるものであります。

（附註）一 Hakluyt Society の會員名簿（List of Members）を見れば如何に西洋の學界、圖書館、讀書界が重きを置いてゐるかが明かであります。獨逸の如きは外務省が會員になつて居ります。

（附註）二 Everyman's Library 中に The Principal Navigations of the English Nation by Richard Hakluyt が加へてあります。

またコックス日記の飜刻本が日本で出版されて居ります事は前に述べた通りであり、既に屢次私が前に引用した處であります。それは今台灣大學の南洋史學の教授で早くからキリシタン史の研究や日英、日蘭、日葡、日西間等對外關係の歴史を研究してをられる村上博士の校訂註釋を附したものであります。さういふものは單に日英交通の歴史を知るのみならず同時に日本の狀態をも知ることが出來るのであります、日本社會史文化史上の有力なる參考史料であります。狹く申しますならば十七世紀の初めにおける大阪の狀態を知ることが出來る、また京都（Miako）の狀態を知ることが出來る、ひとりこの平戸とか長崎とかいふやうな、對外關係上重要な歴史的地方都市のみならず、ま

た當時の政治上外交上重要な家康公の居りました駿府即ち今の靜岡、或は東海道の各驛又德川幕府のあつた江戸のことなども知ることが出來るのであつて其等の地方史鄉土史上の有力なる參考史料であり、非常に貴重なものであるといふことを、私は申したいと思ひます。

また同じくその當時日本にゐた英人の手紙を集めたもの、即ち千六百十一年から千六百二十三年における日本在留の英人の書翰集として村上直次郎博士、村川堅固博士が共編されたものが日本で明治三十三年に出てをります、今其書名を原語で申しますれば

Letters written by The English Residents in Japan 1611-1623. with other Documents on The English Trading Settlement in Japan in the Seventeenth century Edited by N. Murakami and K. Murakawa.

それからそのほかに大學の史料編纂係の方にいろ〳〵寫したものがありますが、さういふものが根本の資料になります、さて前述 Richard Hakuyt ゥ共に海洋探檢文學で有名な英人に Samuel Purchas (1575?-1626) なる人があります、其人の蒐集編纂したものに Hakluytus Posthumus or Purchas His Pilgrimes なる大編纂物があります。それには新しく出版された新版があります。其新版 Hakluytus Posthumus or Purchas His Pilgrimes In Twenty Volumes の Volume III には English voyages beyond the East-Indies, to the Ilands of Japan, China, Cauchin-China, the Philiplnae with others, and the Indian Navigations further prosecuted. 中 1111. The Voyage of Captain Saris in the Cloave, to the Ile of Japan, が掲載されて居り又 Richard Cocks. の部分もありますがそれは短いものであります。

(附註) ケンブリッヂ大學出版部出版の英文學史 (The Cambridge History of English Litelature) 第四卷 (Volume IV) には第四章海洋文學 (The Literature of the Sea) なる一章を設け From the Origin to Hakluyt ゥ時代を示したる見出しの下に Hakluyt を評したる一節に Hakluyt was a Pioneer n the literature of English maritime discovery ゥいふて居ります。

又第五章 Seafaring and Travel The Crowth of Professional Text Books and Geographical Literature の題するつぎに

The mantle of Richard Hakluyt fell upon the shoulders of samucl purchas, a great editor of narratives of travel and a man of many words but of less modesty than his predecessor. Hakluytus, Posthumus, or Purchas His Pilgrimes, Contayning a History of the World in Sea Voyages, and Lande Travells by Englishmen and others, was published in 1625……

と書いてあります。又日本における英人（An Englishman in Japan）なる見出の下に William Adams の書翰體日本旅行記が Purchas His Pilgrime 中に含まれて居る事が書いて其一部が紹介してあります、但し文中歴史的に誤つた點があります。

その他にハリス、コレクション、オブ、ボエーヂス（Harrs Collection of Voyages）といふ非常に大部の旅行記集があり京都大學東洋文庫又私の學校にも所藏してゐますがそれを見るとウイリアム・アダムスの旅行記その他のことがあります

この旅行記は英國邊りにおいては古くから出版されてをりまして非常に歴史的によき研究の資料となります。

（附註） John Harris D, D, (1667-1719) の旅行記集（Collection of Voyages and Travels）はコロンブス（Columbus）よりアンソン（Anson）に至る旅行記を集めたもので英語では Hakluyt. 及 Purchas, 等其他伊、佛、ラテン、西、蘭等の旅行記を集めたもの我校の松田文庫に私が求めましたものは其改訂增補版で千七百四十四年から千七百四十八年に亘り二卷 John Camptell が出版したもので第一卷に To the Merchants of Great-Britain と大書した長文の獻詞（Dedication）が千七百四十五年十二月三日附にて書いてあります。高位高官の Great Names and high Titles の人々に獻じたのではなく To The Merchants of Great-Britain に獻じたもので商業の利益天職等を高調し富と商業商業と自由の離るべからざる事を述べて居ります。

しかし改訂者でなく原著者は Vice-President of the Royal Society でありましたが非常な貧乏（Great Poverty）

な狀態の内に永眠したこの事であります。(Allibone's Dictionary of Authors) 同情に堪へないし、皮肉な感があります。しかしかゝる大册の旅行文章を彼に依囑して編纂せしめ以て出版した英國出版界は賞揚すべきではあるまいかと思ひます、(Dictionary of National Biography vol. IX John Harris の部參照)

また國民をして奮起せしめるといふやうなものがあると思ひます、きくところによれば此の大阪の朝日新聞社の開國文化大講演會もその趣意の一つは實にこの對支貿易の不振といふやうなことについて大阪の實業家を奮起せしめ或は日本國民をしてこの世界における日本國民の位置といふやうなことについて奮勵一番せしめるところの助けになりたいといふことであるといふことを私は承つてをりますがさういふ意味からして私は英國で出ましたハリス・コレクション・オブ・ボエージスの初めに書いてある To the Merchants of Great-Britain 英國の商人へデヂケーションの言葉は實に私共を感動せしめます。英國がこの世界に領土を多く持ち太陽の沒するところがないといはれて居ります。(これは元のスペインに就てもいはれた言葉でありますが) 然し侵略的の事は最早や今日の時勢とは相容るゝべからざるものでありますし、また帝國主義には反對があるが、しかしながらこの國民的發展といふことに如何にこの英民族が努力したかといふことは私はハリスコレクションのこの大册の卷頭を見て深く感ずるのであります、さうして私はその内にウイリアム・アダムスの旅行記などがあるといふ歴史的の興味或は伊太利人マルコ・ポーロ (Marco Polo) の旅行記或は其他爾人ポルトガル人等の旅行記があるといふことのほかに、この日本の青年をしてかゝる立派な旅行記集といふやうなものに接して日本における出版界の模樣などと比較し日本國民に警告を與へるといふことは私は必要と思ひます、私共が日英交通の歴史を論究する上に其參考ともなる上述の旅行記及びそれを集めた Hakluyt. Purchas 及 Harris 等の旅行文集に敬意を表したいのであります。

私はこの出版界の英國における堅實さといふことを非常に尊敬するものであります、なほ文獻的に申せばアダムスについてロンドンにある日本協會 (Japan Society) の雜誌上に掲載のものか或はまた日本にある日本亞細亞協會雜誌 (Transactions of the Asiatic Society of Japan) 中に例へば曾つて東京帝國大學に史學を講じて居られましたドイツ人のド

クトル、リース氏（Dr Laudwig Riess）が平戸における英國商館の歴史を非常に確實に書いたものもありますことは前に屢々引用した通でありますそれでこの日英の交通史といふものはこのウイリアム・アダムス、それからつゞいて平戸に渡つたそのほかのセーリス、コックス其他の人々の事蹟或は英國商館の歴史といふものが非常に重要なことであります、しかしその平戸の英國商館は不幸にして失敗に終つたのでございました。がそれは金錢的、經濟的に損失をなし自發的に日本から去つたといふだけの事で今日から觀ますればアダムスの書翰、セーリスの航海記、コックスの日記等は歴史的に價値高きものであります。

13　日支交通及び日葡交通の斷絶と平戸和蘭商館の長崎出島に移轉德川幕府の所謂鎖國政策に就いて。

家康が元和二年（西暦千六百十六年）に薨去しました事は前に述べました通りでありますが、其後德川秀忠は爰に英國人に與へた特許に制限を加へ以前大阪、京都、堺、江戸等に支店代理店等を設け直接取引をなす事を許して置いたのを禁じて平戸にて貿易をさせることに局限しました。その後段々と鎖國的傾向を増しました。

家康の薨去後德川幕府は基督教禁止を厳にしましたがマニラの宣教師が渡來して基督教を布教せんとするものが絶えませんでした。

（附註）　A short description of the Great and Terrible Martyrdoms which took place in Japan in the year 1622. Translated from an old Spanish Pamphlet published in Madrid in the year 1624. Published by J. L. Thompson & Co. Kobe, Japan. 1927. 參照

それ故に幕府は遂にイスパニヤ人の通商貿易を禁止せざるを得なくなりました。即ち日西間の宗教的交通を斷絶せしめる爲めに經濟的交通をも斷絶するのやむなきに至りました。これは寛永元年（西暦千六百二十四年）の事であります。

フイリツピン諸島政府は日本との交通貿易を盛ならしめんが爲め千六百二十三年（元和九年）司令官ドン、フエルナンド、デ、アヤフ Don Fernando de Ayala 船長ドン、アントニオ、デ、アルセ Don Antonio de Arce を日本に派遣しました。船は薩摩に着きましたが當時基督教徒の迫害が盛んでありましたから領主の保護の下に薩摩に滞在し翌年即ち千六百二十四年（我寛永元年）の春長崎を經て江戸に登らんとしましたが其の途中德川幕府は呂宋の使節を却けイスパニア人との貿易を禁止しました。邪法を傳へて止まざるを以て通商を禁ずるといふ考へに出でたものであります。即ちマニラとの通商は止りました。

ルソンに在る Spanish Governor は宣教師の渡航禁止命令（Orders forbidding Missionaries to go to Japan）を發し貿易のみの繼續を請はんと欲しましたけれどもそれは無効でありました。かくてマニラ（Manila）と日本間の交通（Intercourse between Manila and Japan は約三十二年間（1592-1624）繼續しましたが遂に斷絶したのであります。即ち英國に次で西班牙と我國との交通は絶えました。而して英國と我國との交通は經濟的理由で英國側が自發的に去つたので絶たれたのでありますが、日西交通は宗教的理由で我國より交通繼續を禁止したのであります。而してルソンの西班牙政府は宗教的交通と經濟的交通を切りはなさんとしたのでありますが我國側では其事の行はれ難きを斷つ爲めに經濟的交通をも思切つたのであります。

和蘭を排斥せんとした西班牙人との經濟的利害關係又宗教關係に就て論及すべきものもありますが長くなりますから省きます。かく the expulsion of the spaniards in the spring of 1624 の爲めに我國と通商する西洋人は葡萄牙人と和蘭人のみとなりました。然るに德川幕府の鎖國的傾向は段々增して參りました。即ち日本人に對しては、先づ寛永八年（西曆千六百三十一年）海外渡航の取締を嚴にし特に長崎奉行に奉書を與へて許可したる船の外渡航を許さゞる方針を立て、寛永十年二月十八日朱印船以外の船の外國渡航を禁じ、又外國に居住したものゝ歸朝に制限を設け、渡航後五年以内に歸朝し再び海外に出でざるものに限り十分詮議の上入國を許し他は悉く死刑に處する事を布告しました。又二年後には日本船の海

外に出づることを嚴禁し邦人の異國即ち外國に赴かんと圖るもの及び異國に居住しその海外居住地より歸朝するものは悉く死罪に可申付事を長崎奉行等に通達しました。（通航一覽卷百七十參照）

（附註）　寛永十二年の日本船海外渡航の禁令（諸法令所載）は村上直次郎著貿易史上の平戸に附錄として轉載しベゼー日本基督教史附錄一一六號譯文を參照すべしと註釋してあります、しかしてこのレオン、パジエス（Leon Pages）著 Histoire de la Religion Chretienne au Japon. Seconde Partie Annexes. には Ordonnance rendue par sa Majeste imperiale, et trannmise par les cing principaux conseillers de l'Empire aux gouverneurs de Nagasaki 7 Decembre 1635 として十七ケ條を佛文に譯してあります。

村上氏は註釋に書いてをられませぬがファレンテイン（Valentyn）の Beschryvinge van den Handel en Vaart der Nederlanderen op Japan には De Ordonnantie des Keizers van Japan A. 1635. den 7 December in 't dagregister……なる見出の下に十七ケ條を和蘭文に譯してあります。Murdock 著 History of Japan vol. II. p. 635 には慶長十二年（1636）の長崎奉行（Governors of Nagasaki）への訓令（instruction）との比較を致してをります。

そこで平戸だけについて申しましても平戸から暹港、呂宋、交趾、安南等に國船が參りまた英國或は和蘭、東印度會社の船若くは支那人の船に使乘し、乘組員として海外に出でたものも多かつたが海外渡航禁止のために平戸人の海外發展も止んだ譯であります。右は平戸人だけについて申したのでありますが他國人についても海外渡航發展の禁止されたことは同じであります。

幕府は前に述べました禁令により日本人の基督教徒との宗教的交通を欠す機會を斷つ考へでありました、而して寛永十三年（西暦千六百三十六年）五月ポルトガル人の長崎にて日本人と雜居を禁じかねて寛永十一年以來長崎の町人二十五人に命じて築かした扇の地紙形の出島に葡萄牙人を移し嚴重に監督して交通貿易を營む事を許しましたが其他のイスパニア人、ポルトガル人並に其子孫二百八十餘人を國外に放逐しました。出島にあるポルトガル人以外のポルトガル人の渡來を

禁じ宣教師の密に日本に來るを防ぎ邪宗教を絶滅する計畫でありました。

然るに寛永十四年（西暦千六百二十七年）に島原の亂（The "Shimabara Revolt", the "Christian Rebellion", the Arima Rebellion）が起り翌年まで續きました。この亂の平定には平戸和蘭商館長クーグバッケル（Koeckebacker）は德川幕府の要望に應じて幕軍を助けました。

（附註） The Arima Rebellion and the conduct of Koeckebacker by Dr. Geerts (Transactions of The Asiatic Society of Japan vol. XI Part I. 所載參照）

此島原の亂後德川幕府は愈々キリスト教を恐れて寛永十六年七月（千六百三十九年八月）入港のポルトガル船に貿易禁止の命を傳へ Expulsion of the Portugese を斷行しました、寛永十六年七月五日の鎖國令（Edict）は最後の鎖國令と稱せられて居ります。其翌寛永十七年（千六百四十年）再び媽港（City of Macao）より特別の使節（Ambassadors）が我長崎に參りましたが特使以下乘組員の主たるもの六十一人を死刑に處し船は燒き使節一行の處分を報ぜしめんが爲め下級船員十三人を小船に乘せ七月十五日（八月三十一日）長崎を發してマカオに歸らしめました。幕府の處置は國際上穩ではありませんでした。

日葡交通關係は天文十一年より起算しますれば九十九年にわたり長崎開港以來六十八年間繼續したのでありますが其交通關係の斷絶した理由は日葡交通は經濟的交通と宗教的交通と分離し難き關係特質を持つて居ると解されたからであります（大正十五年七月一日發行新小說特輯號「南蠻紅毛號」所載村上文學博士稿「南蠻貿易と吉利支丹宗門」參照）

かくて西洋人として通商するものは和蘭人のみとなりました。而して寛永十八年（千六百四十一年）に平戸の蘭館は長崎の出島に移されました即ち曾て葡萄牙人の居留地であつた跡に移されたのであります。

（附註） Bladen over Japan door J. H. Levyssohn Hirado en Desjima door J. Habbema 等參照

此の如くにして慶長十四年（西暦千六百九年）に蘭船ローデ・レーウ・メット・パイレン（De Roode Leeuw met de

Pijlen）及びフリフーン（De Griffioen）と稱する二艘が平戸に參りましてから起算して寛永十八年（西暦千六百四十一年）まで三十三年間平戸に出入した蘭船は長崎に來往する事となりました。（異國叢書收錄村上氏註增訂異國日記抄參照）

（附註）一　蘭船 De Roode Leeuw metde Pijlen を村上氏は其著「貿易史上の平戸」中に把箭赤獅號と和譯し居られます、漢字使用の適否は今茲に論じませぬ。英語ではこの船を簡單に Red Lion と譯して居ります。次に蘭船 De Griffioen は英語の Griffon 又は Griffin で希臘神話にある怪物で前半身は鷲で後半身は獅子であります、それで村上氏は鷲獅號と譯して居られます。

（附註）二　故内田銀藏博士藝「近世の日本」第三講鎖國は所謂鎖國の意義又其得失研究上辻博士又新村博士等の所論と共に參考となります。しかし日西交通に就て論述されし處不足の感があります。

14　英人（東印度會社）の日本通商復活の計畫

元和九年（西暦千六百二十三年）まで平戸にて交通貿易を營んで居りました英商館の閉されました後五十年を經て英國東印度會社の船レターン號（Return）は延寶元年（西暦千六百七十三年）五月二十五日に長崎に入港して通商關係の復舊を請ひました。それに至ります前にも屢々平戸英商館の再開使用（re-Occupation）別言すれば復興復活の計畫は提議されましたが結局實際の効果はありませんでした。其事例はコックス日記（Diary of Richard Cocks）を編纂出版しました Edward Maunde Thompson 氏の序文中に列擧記述されて居ります。

（附註）今 Edward Maunde Thompson 氏が編纂されたコックス日記の序文中日英通商再開に關する諸計畫の大要を左に紹介して見ます。

バタビアの參事會（Council at Batavia）は平戸英商館再開を主唱し千六百二十七年之を建議し又千六百三十三年東印度會社の Smith wick（古賀十二郎君著長崎志正編附考第九三頁英人の日本通商復活の計畫の部に Southwick

とあるは Smithwick の誤植又は誤記）は再び此問題を提議し千六百五十八年に東印度會社は日本との通商を再開すべく三艘の船を準備しましたが風の季節を遲れた事（the lateness of season）又和蘭との戰爭の豫想（Prospect of a Dutch War）の爲めに斷念しました。

千六百六十四年に東印度會社は再び眞面目に日英通商再開の企畫（Undertaking）を考慮しバンタム（Bantam）に書を發して平戸英人の舊 Settlement に關する報告を求めましたが平戸英商館閉鎖後日月を經過する事まだ久しからざるに記憶さるゝ處少なく其返書中に

"In this factory here is not the least remembrance of your servants acting in Japan formerly; only your agent hath procured ajurnal of a voyage made Thither in 1615; but it mentions only the acting of the mariner, nothing of the factor" (India Office. Original Correspondence, Vol. XXVIII, no, 3041.)

と書いてありました。千六百六十八年に日英通商再開に關する委員を擇び翌千六百六十九年（古賀十二郎君著長崎志正編附考第九十三頁に一六六五年とあるは誤）に再びバンタムに調査を託しました處、バンタムよりの返事に英商館の建物を蘭人が買收せんとしましたが平戸の大名（Daimio）はこを拒絶した、其理由は我等英人の平戸に歸り來らん事を期待したが爲めであること報告してありました。

千六百七十年には英船 Advance 號がバンタムに派遣され便宜日英通商再開に便用せん爲めの用意でありましたが同船はペルシャに派遣せられ日本へは參りませんでした、しかし千六百七十一年 Crown 號及 Bantam 號の二船が台灣（Taiwan）を經て長崎に向ひ平戸英商館の場所及び英商館閉鎖の理由調査を命ぜられて居りましたが兩船共に行衛不明となりました。

又同年にバンタムの Agent は報告して "there are some Scotch, Irish, etc., There (at Firando), Although we know not by what occasion there" 云々と書送られたことは多分英人の子孫（descendants of the old settlers）を暗

示したものゝ思はれます。

前に述べました如く倫敦の東印度會社は平戸英國商館閉鎖後屬々日本との交通貿易の再開を計りましたが、千六百七十一年（寛文十一年）に至り終にその目的のために日本に船を送ることに決定し、Experiment 號 Return 號等の英商船は英國を出帆してバンタム（Bantam）に向ひ同地よりジャンク船カメル（Junk Camel）を水先案内（Pilot）として台灣に向ひ、千六百七十二年（寛文十二年）七月二十六日台灣に着しました。

台灣にては商館の設置通商條件の交渉をなし台灣及び澎湖島間に約一ケ年滯泊し最初「エキスペリメント」號（The Experiment）が日本まで參るはずになつたのを變更してリターン號（The Return）のみが單獨に日本に向ふことゝなりました。

（附註）一、イームス氏著「支那における英人」（The English in China by James Bromley Eames）

二、The Chrovicles of the East India Company trading to China, By H. B. Morse vol. 1. P. 41.

三、カムベル牧師（Rev. Wm Campball）著「和蘭治下の台灣」（Formosa under the Dutch）附錄B初期英國との交通（Early English Intercourse）西暦千六百七十年（A. D. 1670）の部に掲くる同年九月十日台灣王と倫敦の東印度會社が台灣に英商館（Factory）設置の條約書寫 Copy of the Contract made with the King of Taiwan on 10 September 1670, for the settling of a Factory）等參照

即ち千六百七十二年六月リターン號は膨湖島を發して日本に向ひ六月二十九日（ケンベル著日本史英譯卷末に載せる日本日記（The Japan Diary）に據る、但し村上氏校註異國日記抄附錄第七十二頁には七月九日と記す又村上氏はリターン號の台灣膨湖島發を六月二十日と算してゐる）（我延寶元年五月二十五日）長崎に着しました。

即ち元和九年（西暦千六百二十三年）まで平戸に在つた英國商館の閉された後五十年を經て英國倫敦の東印度會社の船レターンは延寶元年（西暦千六百七十三年）五月二十五日に長崎に入港して通商關係の復舊を請ひました。英船は彼の千

六百四十七年に來た蘭船の如く取扱はれなかつたのであります。

時の長崎奉行岡野孫九郎及び松平鍋島丹後守光茂（肥前國主）は江戸に其の由を注進しました。また一方に「リターン」號の兵器を陸揚し（長崎古今集覽所藏寛文十三年丑五月二十五日ゑげれす人津萬覺帳參照）船内に西班牙人または葡萄牙人等の潛伏なきを確め主としてポルトガル語又蘭語を以て補ひ質問をはじめました。

（第一）に日本人の質問に對して英人たる事を確め四十九年前通商したる事英國王及東印度會社よりの書翰を持參した事等を答へました。

（附註）　英國王チャーレス二世より將軍家に贈りし書翰及び東印度商會より將軍に呈せし書翰はロンドン市印度事務省に藏する支那史料追加 Supplement to China Materials 第一卷に載せてあるのを村上氏校註異國日記抄に轉載してあります。

（第二）に宗教について質問が行はれました、即ち吉利支丹宗門改の手續がありました。檢使は先づポルトガル人の宗教について尋ねました。即ちポルトガル人はローマンカソリック Catholico Romano なるか否かを問ひ、英船長は然りと答へました。又サンタ・マリア（Sta Maria）又キリスト（Sto Christo）の像その他諸聖人の像を拜するの有無をたしかめ、英船長は聞知する處を答へたが、宗教（religion）を異にする故詳細は知らず英人は改革された宗教（reformed religion 蘭讀に所謂 Gherefomeert）を信ずる事恰も和蘭人と同じであると答へました。又蘭人と同じくクリスチャン Christian ではあるがローマ教徒（Papist）ではないと答へました。

此質問の行はれました七月六日は偶々日曜日に當りセント・ジョージ十字旗が揭揚されてありました。そこで質問が旗の問題に移りました。即ち何故に今日旗を揭揚するかの質問に對して日曜日なる故でありそは我國の慣例（cur custom）であると平明に答へて居ます。そこで又神を拜する方法に就ての質問に移りました。

長崎古今集覽所載寛文十三年丑五月二十五日ゑげれす入津萬覺帳中に次の如く書いてあります

えげれす人、おらんだ人佛の事えげれす言葉にて一がつこおらんだ言葉にて一ごつこえげれす人おらんだ人には佛こ申事惣て無御座候がつこごつこ、申候は同前にて御座候へ共口少違ひ申候かつこごつこ、申候はかたち無御座候是は天性にてえげれす人おらんだ人共天道を拜し申申申候右之通に御座候

（附註）一　ケンペル日本志英譯の卷末に附載されて居る英船レターン號船長 Simon Delboe 等の日本日記（The Japan Diary）は英國側の史料として第一に擧ぐべきものであります。故に主として之れを參考し更にそれに長崎古今集覽所載寛文十三年丑五月二十五日えげれす人津萬覺帳の如き日本側の史料を加味して以上の事を申述べました。然しケンペルに載する處のその内容文句に就ては渡邊修次郎氏より私への通信によればケムペルの抄錄は完全なものでなく渡邊氏が渡英の際持歸られたものがよいこの事であります。しかしてこれは今東京帝國大學の史料編纂の方に納められてゐるこの事であります。又松方幸次郎氏に讓られたものもあるこの事でありますが私は共に未だ拜見してをりませぬ。たゞケンペルに據つたのであります。

（附註）二　前に述べたケンペル氏日本志英譯本卷末に揭げられた日本日記 The Japan Diary の外に日本側の史料として長崎古今集覽（Past and Present of Nagasaki）中の『寛文十三年えげれす船入津萬覺帳』は最も詳細なものであります。されば村上直次郎氏校註コックス日記飜刻本にも之を引用してゐられます。

（第三）に最も重要なる日英通商復活拒絶の理由こ視られたのは、英國王チャールス二世（Charles II）が時のポルトガル國王アルホンソ六世（Alfonso VI）の父君卽ちポルトガル前國王ジョアン四世（Joao IV）英語流に申さばジョン四世（John IV）の王女カサリン（Infanta Catharine）を迎へて后こして居つた事であります。卽ち德川幕府の恐れた葡萄牙國こ英國が別特の關係を結んで居つた事を幕府は掛念して日英通商復活拒絶の決心をなしたものであります。この英葡兩國王室の結婚は Return 號の我國に來航したよりも約十年餘も前に千六百六十二年五月二十一日に行はれて居り、しかもその結婚は英葡兩國の外交的政略的意味の加はつたものでその前年六月二十三日に英葡同盟條約が調印されて居ります。又

此結婚を發議した葡國使節（Ambassador）フランシスコ・ド・メロ（Francisco de Mello）の提案により葡萄牙領 Bombay の外に Tangier も英領に移されました。（ケンブリッチ近世史第五卷第五章參照）皇后カサリンには王子も王女も出ませんでした。その事は日本側の史料にも知れて居ります。

要するに英國王 Charles II の結婚は葡萄牙領印度の Bombay を英領となし、後年英國の印度に發展上の基礎となしましたが、他方に日本との通商關係復舊の願望を日本より拒絶さるゝ口實を日本に與へました、勿論それは和蘭の密告によるものであると傳へられて居ります。

幕府は長崎奉行等長崎側の官憲よりも嚴格に解し英國王チャールス二世が吉利支丹宗の葡國王女を后とするは危險であるとして東印度會社の通商復活を拒絶する事に決しました當時島原亂後歲月を多く經て居らず、吉利支丹宗を警戒する事甚しかつた事は想像に難くないのであります。

長崎奉行岡野孫九郎が閣老の訓令に基き用人河原武兵衛、與力和田彌一左衛門、通事加福吉左衛門富永市郎兵衛をリターン號に遣し申傳へさせた趣は次の如くであります。

從彼國商船通路四十年令斷絶、其上近年はホルトガルの國主と結婚娶之緣親、出入有之候、先年爲御訴訟、ホルトガル國主よりかれうたふね長崎へ離着岸候、依爲切支丹宗門信仰之國、向後堅渡海仕間敷候、縱風に放され、日本之地に流來候共、船人共悉御燒捨可被成旨被仰付候國と緣組仕候段、不屆に被爲思召候……依之今度商賣之儀不被遊御赦免候之間、貨物不殘積戻候之樣にと依御下知云々

（通航一覽第六、卷二百五十三、第三百六十一頁參照）

（附註）　日本が和蘭側の忠告に基き英國との通商復活を却けました口實理由となりましたチャールス二世（Charles II）とポルトガルの王女（當時のポルトガル王の妹）との結婚關係に就いて西洋史特に英國史葡萄牙史の文獻を二三參考までに次に掲げて見ます。

(1) ヒユーム (David Hume) の英國史、リチャードグリーンの英國民略史等早く出版された英國史、又 G. M. Trevelyan の England under the Stuarts 等新しき英國史の書物にもこの結婚の事は書いてあります。

(2) 葡萄牙領印度のボンベイ (Bombay) を英領に移すまでに問題紛擾顚末に就てはフレデリック、チャールス、ダンバース (Frederick Charles Danvers) 著「印度における葡萄牙人」(The Portuguese in India) 第二卷第十二章參照

(3) チャールス二世に就てはアクトン卿の「チャールス二世祕史」、O. Airy 著「チャールス二世」其他參考すべき論著ある事はケンブリッヂ近世史第五卷卷末の參考書目に多く示されてある。

(4) ランケ全集中「主として十七世紀における英國史」ライプチヒ千八百七十年第二版第四卷第三章「對外政策關係策、王室の結婚の部」參照

ランケ原著英國史の英譯本、牛津大學出版部千八百七十五年版第三卷第三章「對外政策、王室における結婚」の部第四百〇四頁より四百〇五頁にわたりチャールス二世の Infanta Catherine との結婚について書いてあります。

(5) チャールス二世治下英國の對外政策についてはランケの英國史に記する處は最も卓越してゐるが Dictionary of National Biography Edited by Leslie Stephen and Sidney Lee vol. IV の Charles II の部の參考書目中にも書いてあります。又此辭書にはチャールス二世について非常に多くの參考書を掲げてをります。

(附註) レターン號事件の參考書又は史料として前に掲げたもの、外に二三左に追記し必要に應じて其內容を引用批判說明して置きます。

(一) トマス、ランダル (Thomas Rundall) のメモリアルス、オブ、ザ、エンバイア、オブ、ジャパンの緒言二十五頁にも平戶英商館の閉鎖又其後通商交通復活を企圖ししかも行はれなかつた次第が單簡に書かれてあります。

(二) 長崎實錄大成第七卷諳厄利亞船入津之事と題する部に曰く

延寶元癸丑年五月二十五日諳厄利亞船一艘入津則通詞を以て如何樣の譯にて渡り來るやと御尋有之彼者共昔年阿蘭人同前に商賣御免の御朱印頂戴し數度平戸に相渡りし處其後國用繁く四十餘年中絶に及仍之其節の御書なる由、書物一通持渡れり、則御披見有しに御朱印にては無之平戸にて取合せし日本文字の書物なり、先づ宗門の儀御尋有しに我々は御法度の切支丹宗門は曾て用ひ不申旨答之然るに諳厄利亞人と阿蘭人兼て不和なる由なりしが此度阿蘭人訴訟出るは近年諳厄利亞國主の方に布留都葛兒國王の娘を令嫁故國中の者共常に南蠻人の交り親しく有之由訴之云々

（通航一覽第六卷二百五十三第三百五十四頁より三百五十五頁參照、及び古賀十二郎氏校訂長崎志正編長崎實錄大成第七卷第二百七十九頁參照）

（三）延寶長崎記に、延寶丑年五月二十五日、エゲレス船一艘、人數八十六人內一人はベンガラ人二人はマカサル人乘組入津仕候、云々と書いてある事は通航一覽二百五十三諳厄利亞に引用されて居る（古事類苑外交部にも引用す）但し延寶長崎港記に「一艘之エゲレス人共申候は去々年十月比三艘列にてエゲレス國出船仕」云々とあるが、それは誤で英國よりは前述の如く「リターン」號と「エキスペリメント」の二隻の東印度會社の船が派遣され、ジャンク「カメル」はバンタムより水先案內として從へられたものであります。

（四）昭和四年六月一日發行雜誌「歷史地理」第五十三卷第六號所載田保橋文學士稿「鎖國時代日英關係復興計畫」は私の大阪における講演後發表されたもので其內特に二の一六七三年長崎における日英交涉の部は私の講演速記改稿上參考した事を茲に明記して感謝の意を表して置きたい、又此論文が全體に優れたる論文である事を私は信じます、たゞ私が前に詳細に論證して置いた舊倫敦東印度會社と新英國東印度會社の區別を看過されたのは遺憾である勿論それは村上直次郎博士の著述故マルドック氏の日本史にも又リース博士の平戸英國館史等にも同じく看過された點で獨り田保橋學士のみをとがむべきではありませぬ。

さて前に述べました如く長崎奉行により傳へられました幕府よりの命令により英船レターン號は長崎を退去すべきでありますが、其日限に就てはケンペル日本志英譯本の卷末に附する英船レターン號船長 Simon Delbol（長崎實錄大成に所謂セイモンデル ホウ）等の日本日記西暦千六百七十三年七月二十日の條（日本舊暦六月十七日）に記する處によれば長崎出港は初風（the first wind）二十日以内に出帆すべしこの命でありましたが、英船長は答へてこは不可能でモンスーン（氣候風）の變更をまたねばならぬ順風の吹くまでには四十日の延期を請はなければならぬこ當局に說明し又滯船中の糧食の心配をうけました。

又長崎を退去後バンタム到着まで航海中要する處の糧食を備ふる必要あり金錢の貯もなくなつて居りましたから積荷を賣却處分し其資に供したいこの望みを長崎奉行に申出でました。そこで奉行はやむを得ざるものこ認め奉行の獨斷にて之を許可し「リターン」號積荷を調査せしめました。

積荷の内容は通航一覽第六所載卷之二百五十三第三百六十一頁にも掲げてあります如く、バンタム仕出こ思はれるものが多く白糸（生絲）支那產絹織物、更紗、精製革、藥品、香料、白砂糖等が大部分で英國產の毛織物は少しでありました。此は約五十年前平戸英國商館が商品選擇上の失敗を繰返さない樣に注意したものこ思はれます。積荷中支那產の商品（China Goods）のみ引渡され糧食及び滯泊中の費用に充てられました。長崎實錄大成第七卷に次の如く書いてあります。

此船糧米等無之由依願、荷物ヲ賣拂セ代銀爲金子ニテ二百六拾兩三分銀九匁有之。此内ヨリ百七拾二兩三分糧米並諸色代相拂、殘金八拾八兩持歸ラシム

（古賀十二郎氏校訂長崎志正編第二百八十一頁參照）

かくてリターン號は延寶元年丑七月二十六日（西暦千六百七十三年八月二十八日）長崎港を去りました。

15　日英交通と英支交通との關係

（遣清特命全權英國使節マカートニーの日英通商開始計畫）

日英交通と英支交通との關係は特に注意を要します。私は前に Cathay Company の事を述べました。又前述の平戸英商館長コックスは日英通商貿易の外に英支通商貿易の志だけ持つて居りました。

（附註）　山口高商『東亜經濟研究』第十一卷第一號所載矢野仁一博士稿『英吉利の日支初期貿易關係』參照

日英通商交通は英支通商交通よりも早く實現されたが兩者共に英國は他國に比し立後の感があります。第十七世紀に屢々日英通商の復興を企圖した東印度會社が千六百七十一年にクラウン及びパンタムの二船を台灣島に派し同地に商館を創設しそれより日本長崎に向はしめんとして果さず又千六百七十三年に長崎に來たリターン號が其前に台灣に約一年滯泊した事は前節に述べた通であります。日本と通商復興の望みを達せずして退去した英船レターン號は其年の九月十三日マカオに到着して居ります。（モース著東印度會社支那貿易史第一卷第四章台灣及厦門第四十二頁參照）

十八世紀に入りて後日英通商の外交的交渉は主として英支通商を背景として居ります十七世紀より十八世紀にかけて英支通商交通は殆んど東印度會社の支那に對す關係と稱してもよいのであるが英國が政府として支那に關係するに至つたのは十八世紀末西暦千七百九十二年遣清特命全權英國使節マカートニー卿を派した時が始めであります。英國がマカートニー卿を派遣した重なる理由は英國への茶の輸入を確實にする希望からでありました。英國に茶の輸入された起原は確ではないが日本茶の方が支那茶よりも早い樣であり東印度會社の舊記中茶に關する最古の記錄は平戸英商館員の書翰に出で、居るものであります（コックス日記索引 Chaw or Tea の部參照）

又前節に述べました英王チャールス二世の后カザリンはポルトガルの王女の時より茶を嗜みし爲め英國王に嫁して後茶が英國に流行したとも稱せられて居ります。

（附註）　矢野博七著「近代支那の政治及文化一〇茶の歴史に就いて一六「英吉利の茶に就いて」參照

Hobson-Jobson 中茶（Tea）の部參照

千七百九十二年九月八日附國務大臣ヘンリーダンダス（Henry Dundas）がマカートネー卿に與へた訓令（Instructions to Lord Macartney）中に次の如き意味の事が書いてある一節があります。

日本國海岸（Coast of Japan）に寄港（touch）してもよい日本は支那と同樣に良好の茶を產し恐らく價格低廉なるべし日本國との通商は頗る困難にして外人は之を企つる事能はざりしが近時其困難は殆んど除かれたりと聞く。

日本の市場を支那市場と互に競爭の位置に立たしむる事を得ば兩國の產物をより低廉に供給せしむる事可能なるべしかかる事の可能なるは北京政府に交涉上便利なるべし。

以上の理由にて日本國皇帝宛公文を貴官に交付すべし事情によつては該公文を送り又は之を中止するも可也

といふ意味の事が書いてあります。

（附註）　ダンダスのマカートニー卿への訓令の一節の原文を示さば次の如くであります、

It is possible that you may find it necessary or expedient to touch upon the coast of Japan, that country produces tea as good as, and probably Cheaper than that of China. The difficulties of trading there which have so long deterred other nations from attempting it, are now said to have almost ceased. It is not impossible that the Competion of the Probability market with that of China might render the commodities of both places cheaper to the purchaser, the probability of such a source might at least operate in some degree to facilitate the negotiations at Peking. You will therefore likewise receive a letter adressed to the Emperor of Japan which you will either deliver, send or suppress as circumstances may induce you to think necessary or advisable."

しかし英國とフランスと開戰のためにマカートニー卿の日本訪問は遂に實現されませんでした。

（附註）一、マカートニ卿支那奉使記
Macartney's Embassy to China by Sir George Staunton
二、千九百二十四年十二月發行
日本亞細亞組協會誌 Second Series vol. I. 所載 The Foreign Relations of Japan in the Early Napoleonic Period by J. F. Kuiper.
三、前掲田保橋學士の論文
四、Report on Japan to the Secret Committee of the English East India Company By Sir Stamford Raffles. With Preface and Notes by M. Paske Swith の序文

16 英艦フエートン號の長崎港侵入

第十九世紀に入りて後約八年を經たる文化五戊辰年八月十五日（西曆千八百八年十月四日）に早朝（day light）蘭國旗を掲揚した異船が長崎港に來ました。しかもそれは英艦フエートン號（H. M. S. "Phaeton"）でありました。長崎港侵入の目的は蘭船を見出したならこれを捕へる考へであつたと稱せられて居ります、しかし蘭船は居なかつたから食糧を供給せしめて去りました。

この事件に就ては日本側にては通船一覽第六收錄卷之二百五十六諸厄利亞國部五に詳述されて居ります。蘭國側の根本史料を利用して文學博士齋藤阿具氏は其著「ヅーフと日本」中に此フエートン號事件及び次節に述ぶべき英人の出島蘭館讓受計畫（Thomas Stamford Raffle）等に就て詳述して居られます。又フエートン號長崎港侵入事件當時の長崎出島蘭館長であつたヅーフ（Hendrik Daeff）の日本回顧錄（Herinneringen uit Japan）を齋藤博士は近頃飜譯して異國叢書の一として昭和三年八月出版して居られます。

齋藤博士の利用されなかつた史料でしかも英國側の根本史料とも申すべきものは往年古賀十二郎君が上京中長崎市役所市史編纂室備付の爲めに丸善を經て故内田魯庵氏を介して買求めたフエートン號の航海日記（Log of the Proceedings of His Majestys' Ship Phaeton）であります。このフエートン號の艦長は Captain Pellew でありました。かゝる根本史料が我國長崎に傳はつたのが奇しき運命であります。この事件の責任を感じて自害し今は長崎諏訪神社境内の康平社に祀られて居る當時の長崎奉行松平圖書頭の靈に告げたい樣な氣も致します。

（附註） 此講演後昭和四年八月發行の現大阪駐在英國領事ベスケ、スミス氏（M. Paske Smith）校註 Report on Japan to the Secret Committee of The English East India Company. By Sir Stamford Raffles 1812-1816. 中に此フエートン號航海日記を長崎縣立圖書館の所藏で其の序文（Preface）中に書いて居られるのは誤であります。そは兎も角この航海日記（Log of H. M. S. „Phaeton") の扉（Title Page）其他内容の寫眞を掲げて居られるのは讀者に便利であります。

又バスケ・スミス氏編纂のこの書物に掲げられたこのフエートン號事件に就て記する書翰史料例へばドクトル・エースリー（Dr. Ainslie）が日本より歸りたる後の千八百十三年十二月二十日附報告書書翰（Letter from Dr. Ainslie reporting his return from Japan. To the secretary to Government）の如きはフエートン號事件及び其影響研究上貴重なる英國側の參考史料であります。

私は他日英國側の史料をも參考して別にこのフエートン號事件を研究したいと思ひます。只今は時間がありませぬからこの重大事件を長く御話する餘裕を持ちませぬ。

（附註）一、日本亞細亞協會雜誌第七卷所載

H. M. S. "Phaeton" at Nagasaki in 1808 By W. G. Aston.

二、故川島元次郎氏著南國史話收錄第四悲劇「三秋の月」は英艦「フエートン」號事件を取扱つたものであります。

17 ラッフルスの長崎出島蘭館讓受計畫

フランス革命の影響として和蘭は佛蘭西治下に置かるゝことなりジャバは英領となりました。ソコデ其機會を利用して蘭人がジャバと日本長崎との通商貿易を營みました跡を調べそれを英人の手にをさめんとするのが新任爪哇總督ラッフルス（Sir Stamford Raffles）の意見でありました。ラッフルスの資格は嚴密に申せば爪哇及び其附屬地の總督（Luitenant-Gouverneur Van Java en Onderhoorigheden, Lieutenant-Governor of Java and its Dependencies）と申すのであります。彼は約三十歳にしてその任につき千八百十六年までその任にありました。（彼は千八百二十六年七月五日四十五歳にて永眠しました）ラッフルスは日英通商交通の開始は英支通商交通を改善する一方法であると見ました。

（附註）　ベスケ、スミス氏はその近著の序文中にラッフルスの意は日英通商を對等主義（Principles of equality）の下に置き英、支、印度及び日本の貿易を東印度會社の翼の下に收めんとするにあつたと辯解してをります。

ラッフルスは日蘭通商貿易を英人の手に奪はんとする計畫を立てたのであります。そこでその方法としては日英通商開始の事を前長崎蘭館長（千八百年より千八百三年まで）であつたワルデナール（Willem Wardenaar）及び英人ドクトル、ヒーンスリ（Dr. Daniel Ainslie）に託し兩人の乘組んだ二つの船を日本長崎に送りました。

ヒーンスリ（David Ainslie）は日本人の疑念を避くるために表面（ostensibly）は出崎商館の外科醫（surgeon to the Factory）として派遣せられ内實は和蘭が日本との貿易を獨占してゐたのを英國政府の手に移しまた一層擴張しまた有利な通商交通の方法を講ずる我日本の國情及び資源を出來得る限りよく調査したのであります。

（附註）　ベスケ、スミス氏著書第六十一頁以下所載千八百十三年六月九日附ラッフルスより宛書翰參照

文化十年六月二十七日（西暦千八百十三年七月二十四日）異船二隻蘭國旗を掲げて到着しました。一はシャーロット號（Charlotte）であり他はマリア號（Maria）でありました。この二船を率る來たのがワルデナールでありました。シャーロ

ツト號にワルデナール等搭乘しマリア號には蘭人カッサ（Cassa）等が乘つて居りました。

ワルデナールが持參した重要な文書であるラッフルスよりヅーフに宛てたる千八百十三年六月四日附書翰に述ぶる處によれば、曾て日本駐在甲比丹並に印度評議官（Opperhoofa of Japan and Counsellor of the Indies）であつたワルデナール（William Wardenaar）は二船を率ゐて日本に派遣せられ和蘭及び此植民地に起りたる事變を日本政府に上申せしめ、ヅーフはワルデナールの直接命令（immediate orders）の下に置かるゝ事と成つたといふ意味の事が書いてありました。

（附註）　齋藤博士著「ヅーフと日本第百三十五頁齋藤氏譯ヅーフ日本回想錄第二百四十三頁參照、バスケ・スミス氏著書第六十六頁參照

ヅーフは右ラッフルスの書翰を見て驚き自分はワルデナールの直接配下命令の下に置かるゝ事となり又千八百九年以來一切歐洲及び印度の通信に接しなかつたから今ワルデナール等の談により和蘭本國が佛國に併合せられ瓜哇は英人か佛人の手より奪ひ取り瓜哇は今は英國治下にある事を聞知して驚きました。ヅーフは抗議して日本長崎出島和蘭商館は瓜哇の附屬地ではない單獨孤立のものであり瓜哇が英國領となつても長崎出島蘭館は其影響を受けないと主張し。逆にワルデナールを虛喝し英船たる事を秘密にせしめ日本人間にワルデナールが米人の醫員を伴ひ來れりとの風說に對してはヅーフは先年瑞典人ツンベルク（Thunberg）の來りし例を以て答へ、又新甲比丹カッサを遣す策を講じました。しかしてワルデナール及びエースル等の承認を得てブロンホフ（Jan Cock Blomhoff）を同航せしめてバタビア英國政廳と通商協約の爲めに派遣しました。

英人はカッサ新甲比丹として任命する事として英船を再び日本に送りそれが千八百十四年八月八日（我文化十一年六月二十三日）長崎に來りました。これが亦ヅーフの巧妙なる手腕により第一回と同じく其最後の目的を達せしめませんでした。英人の出島護受計畫は二回の失敗で終りました。しかして千八百十七年（文化十四年）に至りバタビアより蘭船長崎に入港しオランダ國の復興を傳へました。又ブロンホフ再來してヅーフは和蘭國王より勳章を賜り出島蘭館の職はブロン

ホフに讓り日本を去る事となりました。

18 開國と條約

前節に述べましたラッフルスの前後二回にわたる長崎出島蘭館讓受計畫の効を奏しなかつた後英船の長崎に來るもの暫らく絶えて居りましたがその商船又は捕鯨船の我が太平洋岸に出沒して我日本人を恐れしめた事は少なくはありませんでした。即ち文化十四年（西曆千八百十七年）にも英船を見ました。

文政元年（千八百十八年）Captain Gordon の乘れる英船が浦賀に入り文政五年にも捕鯨船が浦賀に來ました。文政七年（千八百二十四年）五月諸厄利亞人即ち英人が常陸國大津濱に來りました。これは捕鯨船でありました。

（附註）日本亞細亞協會雜誌第三十三卷第一部所載 British Seamen and to mito Samurai in 1824 by E. W. Clement

千八百三十三年これまで東印度會社の獨占した東洋貿易を公開しました結果支那と英國との貿易盛んとなり阿片輸入の事より千八百四十年英支兩國の間に戰爭始まり支那は連戰連敗千八百四十二年八月二十九日の南京條約にて香港を割讓し廣東、厦門、福州、寧皮及び上海の五港を開くに及んで英國が日本に開國を迫る形勢ありと見てオランダ國王は進んで日本に開國を勸告しました。

（附註）Europe in China. The History of Hongkong By E. J. Eitel.

ウイルレム二世の書翰參照（村上氏著日蘭三百年の親交に掲載說明す）

和蘭の日本開國に對する最初の努力は無効であつたが米國が我國の開國を希望しペルリ提督（Commodore Perry）が渡來する事が米國で決定したので蘭國王は再び開國を促す事となりました、ともかく時勢といふものが變つてきてまたオランダ自身も開國を勸めるといふことになりました。オランダ人 J. A. Van der Chijs 氏の著述で「世界商業のために日本の開國に對するオランダの努力」（Neerlands streven tot opensteilling van Japan to voor den Wereldhancel）といふ書物が

ありますがそれに色々書いてあります。要するに時勢の變遷によりオランダ自身が日本の開國といふことを勸めるやうになりました。即ちもはや自分が獨占することは出來ないといふやうになりました。その事を和蘭は自覺し我國にも開國を再度忠告したのであります。

魯西亞使節水師提督プーチャチン（Puttatine）は嘉永六年（癸丑年）（西曆千八百五十三年）七月十八日長崎にその乘組める軍艦フレガット・パルラーダーの外三艘の艦船を率ゐて來り國書を長崎奉行に呈して開國を促しました。しかし德川幕府は之に應じなかつたのであります。

（附註）　長崎高商研究館年報第二册所載拙稿「鐵道に關する知識の我國に傳はりし門戸としての長崎」參照

それと前後して嘉永六年より七年（安政元年）にわたり米國の Commodore Perry が我國に來航して開國を迫りました。彼はシーギルトの忠告に從はず即ち長崎には來らずして一路江戸に近き浦賀に來りました。然して魯西亞と異り米國は開國の目的を達しました。米國の Commodore Perry の來ました後同じく安政元年（西曆千八百五十四年）閏七月十五日英國水師提督スターリング（Admiral Stirling）（當時の文書として長崎に殘存するものにはスティルリンギと記す）が四隻の艦隊を率ゐて長崎に來り書を長崎奉行水野筑後守に呈しました。翌安政二（卯）年スターリングは再び日英約定（條約）批准交換の爲めに來朝しました。その當時の古文書として長崎には安政二年英吉利條約和解一綴の如き文書が殘つて居り今は長崎縣立圖書館にて保管されて居ります。

ペルリが嘉永七年三月三日（千八百五十四年三月三十一日）日本と締結した條約は所謂日本國米利堅合衆國和親條約（Treaty of Peace and amity between Japan and the United states）であります。ペルリの率ゐたる米艦が日本を去りて後前述の如くスターリングの率ゐた英艦は長崎に來りましたスターリングは長崎奉行等と應接の結果長崎箱館の兩港に入港を許す約を結ぶ事として協約書に調印しました。これは日米和親條約よりも簡條の少ないものであります。兎も角米英兩國との和親條約が順次成りましたから露國も和親條約を結ぶ事となりました。

（附註）　又先にプーチヤチンが長崎に來た時に第一に露國側から申出した兩帝國の境界をカラフト島に定めんとする國境問題も議論に上りましたがこれは不得要領に終りました。

安政五年（西曆千八百五十八年）にはエルギン卿の來訪（Lord Elgin's Mission）あり日英修訂條約が締結されました。このエルギン卿は初めは支那から長崎に來て其から下田港に米國領事タウンセンド・ハリス（Townsend Harris, American Consul）を訪ひ暫らくにして江戸に向ひ江戸にて修訂日英條約を締結しました。

（附註）　この條約の性質に就てはモスマン（Samuel Mossman）著新日本（New Japan）第五章第百〇三節 General Character of the British Treaty of Yedo の部參照

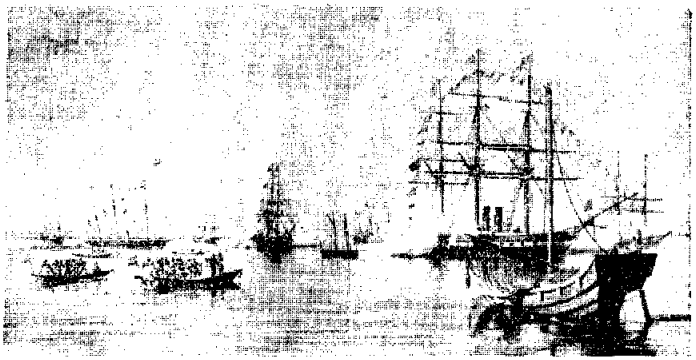
この條約締結調印の日に丁度その日がビクトリア女皇の皇婿アルベルト親王誕辰の佳節（Prince Albert's birthday）に當りましたので英國女皇クイーンビクトリアの名において我德川幕府に品川沖において快遊船（Yacht）「エンペロル」（Emperor）を獻上しました。このことは大隈伯の開國大勢史の内にもエルギン卿の祕書官オリファント（Laurence Oliphant）の書いた書物（Narrative of the Earl of Elgin's mission to China and Japan）を參考して叙述してありますがこのオリファントの原書にも又大隈伯の開國大勢史にも共に快遊船獻上式の繪圖は掲げて居りませぬ。それで私は拙稿「日英交通史料」（二）を掲載したる我長崎高商研究館年報第九年第二册（昭和四年三月發行）の卷頭に掲げて置きました。この原圖（エングレービング）は開國文化展覽會に私は出品して置きました。

（附註）　朝日新聞社發行開國文化大觀五五頁にエンペロル獻上式圖は掲載されてをります。

またこの安政五年修訂日英條約調印の際通譯をした長崎人故森山多吉郎氏（オリファント著書第二百三十六頁參照）の寫眞も同じく展覽會に他の御方により出陳されてあります。

（附註）　開國文化大觀五十九頁參照

さて前述の日英修訂條約歸結されたゝめに日本に永久的に外交官の駐在派遣を必要として最初の任に當るべく命ぜられ



第七圖　快遊船エンペロルを德川幕府へ獻上の圖（安政五年七月十八日）

英日修好通商條約締結に際し同日午後品川沖に於て快遊船エンペロルを向眞寫）圖の式上獻に府幕川德我ていおに名の皇女女ヴィクトリアを英國に於て江戸に於て八月二十六日（西暦千八百五十八年）

つて右よりエンペロルの船遊快に即ち船が帆を張せる日の旗

たのがオルコック氏（Rutherford Alcock）で氏は日本駐在英國總領事として支那の廣東より我國に赴任して來ました、その途中上海より長崎に渡り江戸に登りました彼は千八百五十九年（安政六年）には日本駐在最初の英國公使（British first Minister to Japan）となりました。文久元年に竹内下野守一行を英佛等六ケ國に派遣しました。これは兵庫、新潟の兩港及び江戸、大阪兩都市の開市を延期せんためでありました。使節一行は千八百六十二年四月末に倫敦に着きました。その記はF・Oアダムスの日本史によく書いてあります。

（附註）The History of Japan by Francis Ottivell Adams Vol. I. Chapter XI. 1862. Arrival of Japanese Envoys in London—Their Negotiations

19　薩長と英國

文久二年（西暦千八百六十二年）神奈川に近き生麥にて英人を薩人（島津久光の從士）が斬つた所謂生麥事件（此事件に就ては歴史地理第三十三卷第三十四卷所載齋藤文藏氏稿「英佛人の觀たる生麥事件」尾佐竹猛氏著國際法より觀たる幕末外交物語附錄一、生麥事件の眞相 Mossman 氏著 New Japan Chapter X 1862.—Assassination of Mr. Richardson の部 Sir Ernest Satow 著 A Diplomat in Japan Chapter V. Richardson's Murder の部等參照）が起り、

又翌文久三年英艦の鹿兒島砲擊が行はれました。しかし薩摩と英國との親交は其後各方面に現はれました其事は島津公爵家にて編纂の英文小册子にも書いて居ります。試に引用して見ます。

The friendship which had sprung out of the Namamugi Affair Continued to grow; mutual trade flourished through Nagasaki and a college called "Kaiseijo" was established in Kagoshima in 1864, where the mysteries of occidental science and learning were taught (Anglo-Satsuma Relations An Historical Sketch, Kagoshima May, 1922 中の一節)

千八百六十三年（文久三年）下の關にて外船砲擊事件が起りました。翌千八百六十四年には各國軍艦を以て下の關攻擊が行はれました。長州の方も薩摩と同じく英國と親密になりました幕末明治維新の際に佛蘭西は幕府即ち大君（Tycoon）を助け英國は薩長即ちミカド（Mikado）を奉ずる新政府を助けました。これは實に外交上英國の先見を示すものであります。

20　明治大正昭和時代日英交通史上の諸項目

日　英　皇　室　關　係

以上二十有餘の節目を分ちて日英交通史概觀を叙述し來りましたが但論じ盡さゞるものがあります、以上は明治に入らざる前の時代に止めました。又それも蒸氣船の發達と共に鎖國の行はれ難く開國のやむを得ざる趨勢なりし事英學傳來史（フエートン號事件と英語研究）等も述べんと欲して述べざりし處であります。又本邦鐵道史上の日英關係、明治以後日英の關係等にわたり論じたい考へでありましたが時間がありませぬからこの邊で御免を蒙ります。

たゞ日英皇室關係に就て恐れながら一言禁じ難い事があります。これは英國皇帝第三皇子グロースター公殿下（Duke of Gloucester）には近く御來朝我聖上陛下にガーター勳章を捧呈遊ばさるる事になつて居る事であります。ガーター勳章は先に明治天皇陛下また大正天皇陛下にも捧呈されました。これ日英皇室の御親善を示すものと恐察致します。

日英皇室關係史は特に私の調べて居る方面ではありませぬから御遠慮申上ぐべきかと存じますが御目出度事と存じますから申上げます。

顧みれば日英交通史の初期においてジエームス一世（James I）より書翰が我國に參りました（ロンドン市大英博物館に現存）（大日本史料第十二編六十一、參照）しかしそれは今日の聖代における日英皇室の御親交とは其性質を異にして居ります。又前に述べました如くレターン號の長崎に來た時にチヤールス二世の書翰が參りました（村上氏校註異國日記抄參照）これ亦同樣であります。

當時は東印度會社と我幕府將軍、又は大名との關係でありました。今日の國家と國家又は皇室と皇室との關係ではありませぬ。我國家と英國特に我皇室と英國皇室との直接關係は明治聖代以後の事であります。千八百六十九年（明治二年）に英國女皇（Queen Victoria）（1819—1901）の王子 Alfred, Duke of Edinburgh（1844—1900）が我國に御來遊になりました。Duk of Edinburgh は英國女皇の皇太子、後にエドワード七世（King Edward VII）（1841—1910）より三歲下の弟君でありました、エヂンバラ公御來遊の事は長崎圖書館に保存されて居る次の文書にも現はれて居ります。

明治二年巳己一月起至庚午七月

外國官來書

外務課

と表記する一綴の文書の長崎縣廳より移されて長崎縣立長崎圖書館に保管されて居る一文書中に

千八百七拾年第二月九日横濱

王子ジューク、オフ、イジンボルク兵庫、大阪及び長崎に行きし次第を委細外國事務掲載に報せし處湊にて王子に對し日本長官の接待方に付英國政府の謝辭を日本政府に述るべきを外國事務總裁余に命じたり依て右長官等叮嚀に取扱に付英國政府の謝辭を日本政府に轉告あらん事を閣下に願ふ　敬白

英國特派全權公使
ハルリー・エス・パークス

外務卿
澤從三位清原宣義
寺島從四位藤原宗則閣下

右書翰に王子ジュニク・オフ・イジンボルクとあるは Duke of Edinburgh を指し此書翰の發信者 Sir Harry Parkes の傳 The Life of Sir Harry Parkes. By F. V. Dicknis and S. Lane-Poole 第二卷第二十八章新日本の部のエヂンバラ公殿下御歡迎準備次第書 (Programme of the Preparations for the Reception of His Royal Highness the Duke of Edinburgh) 及びミットフオルド氏の覺書 (Memorandum by Mr. Mitford) (ミットフオルド氏は後に Lord Redesdale と呼ばれたる人である) 等參照

以上の外に同日附英國特派全權公使ハルリー・エスパークスの他の書翰 (澤宣義及寺島宗則に宛てたる) 又パークス宛のクラレンドン (Earl of Clarendon) の書翰 (千八百六十九年第十二月二日外務局において) の譯文の寫等が同一の文書に綴込まれてあります。又ビクトリア女皇の皇太子であつたエドワード七世の王子即ちビクトリア女皇の皇孫に當る Albert Victor (1864—1892) Prince George of Wales (今の King George V) 等は千八百八十一年 (明治十四年十月二十四日我東京に來られました。當時の模樣はよくリー氏著エドワード七世傳に書いてあります。

(附註) King Edward VII A Biography by Sir Sidney Lee 第一卷の索引に示す如く Japan: Visit of Princes sons to, 593—5 の部參照

英國皇帝より我明治天皇陛下へガーター勳章の御贈進即ち第一次のガーターミッションに就ては The Garter Mission to Japan by Lord Redesdale なる書物に詳に書いてあります。著者 Lord Redesdale はコンノート殿下 (His Royal Highness

Prince Arthur of Connaught）に隨行して來た第一位の人であります。

（附註）　このレデスデール卿はもと Mitford と稱し幕末維新の頃より我國に來て居つた人であります。明治初年 Duke of Edinburgh の我國御來訪の折の覺書（Memorandam）を書いた人である事は前に一言しました。

Mitford 氏の日本語の語學的才能に就てサ・エルネスト・サトウ（Sir Ernest Satow）著「日本における一外交官」第二十三章將軍の沒落と題するうちに一寸書いてあります。

リー氏のエドワード七世傳第二卷第三百十二頁に第一次ガーターミッションに就いてコンノート殿下の隨行員の人選にエドワード七世御自身御苦心遊ばされたとが書いてあります。エドワード七世が日英の親善に苦慮遊ばされたものと私は恐察します。エドワード七世の御代に至りてガーター勳章を贈呈さるゝことになりました。日英同盟もエドワード七世時代に成立しまた交渉進行の電報等を親閲遊ばされました。（リー氏著エドワード七世第二卷第二百八十二頁、二百八十五頁より二百八十六頁まで參照）

日英同盟は現英國皇帝の御代まで續きました。前述の如く王子であらせられた折我國に御來遊された現英國皇帝 King George V. も日英親善に御つとめになりましたものと存じます。英國皇太子殿下は先年我國に御來遊になりました。

今上天皇陛下の未だ皇太子殿下であらせられました折、歐洲御巡遊の御事あり、其際最初に御訪問遊ばされたのは英國でありました。又秩父宮殿下の曾て英國に御留學遊ばされました事は私が今申上げるまでもなく世人の御承知の通であります。此の如く日英御皇室の御親善は誠に祝すべき御事と存上げます。

右聊か日英皇室關係の歷史を簡單に申上げて御話を終ります。（昭和四・三・二一）

開國文化（終り）

昭和四年十一月十五日印刷
昭和四年十一月二十日發行

開國文化（定價二圓）

大阪市北區中之島三丁目三番地
株式會社朝日新聞社
著作兼發行人　大道弘雄
大阪市北區中之島三丁目三番地
株式會社朝日新聞社
印刷所　大阪朝日新聞發行所

複製を許さず

發行所　大阪市北區中之島三丁目三番地　株式會社　朝日新聞社